

礼文・利尻島編年の新検討 — その(1) 香深井5遺跡を中心として —

柳澤清一

〒162-0041 東京都新宿区早稲田鶴巻町513 早稲田大学総合研究機構 先史考古学研究所

A New Consideration of the Pottery Chronology of Rebun and Rishiri Islands Pt.1: With a Central Focus on the Kafukai 5 Site

Seiichi YANAGISAWA

Institute of Japanese Prehistory, Comprehensive Research Organization of Waseda University,
Nishi-waseda, Shinju-ku, Tokyo, 169-8050 Japan

Abstract. This is a first discussion to reconsider the Northern Chronological Order System in detail using non-publication material from the Kafukai 5 site.

はじめに

アイヌ民族の前史を先史考古学の立場から明らかにする研究は、文物の変遷秩序を精密に捉えた編年体系に抛らねばならない。これは、戦前の『ミネルヴァ』論争をあらためて想起するまでもなく、余りに自明であると言えよう。

とは言いながら、北方編年の現状を鑑みると、果たして文物の同時代性が正確に、そして精密に捉えられているかどうか、全道的な疑問があるように思われる。筆者は、そうした問題意識のもとに、1972年以降に通説化した北方編年に関して、「遺跡・地域・広域」単位の編年を統合的に見直して、新しい北方編年体系(第1～3版)を提案している(柳澤, 2008a: 630, 2011a: 214, 2015c: 516) (註1)。

本稿では、その新編年体系の妥当性について、局地的に検証することを目的とし、道北の島嶼域を観察フィールドとして選択する。その手法としては、まず遺跡単位の編年を仮設する。そして、その交差対比を行うことで、道北と道央、道南を結ぶ広域編年を編成し、通説編年を見直すための論点を組織的に明らかにしたい。

初めに、礼文島の香深井5遺跡で未公表とされた

資料に焦点を当て、主軸となる遺跡編年を仮設する。ついで利尻島へフィールドを移す。亦稚貝塚や沼浦海水浴場遺跡、種屯内遺跡などの未公表資料の検討を通じて道央・道南との対比を反復的に検証し、北海道西部編年の精度をさらに高めて行きたい。

この作業を通じて、アイヌ前史をめぐる筆者の言説の

1. 青苗砂丘遺跡
2. 大川遺跡
3. K39・K435・K523 遺跡
4. 中島松・公園・西島松南遺跡・中島松6
5. ウサクマイN・末広遺跡
6. 当麻内
7. 毘沙別
8. 沼浦海水浴場遺跡
9. 亦稚貝塚
10. 種屯内遺跡
11. 元地遺跡
12. 香深井1(A)・5・香深村遺跡
13. 内路遺跡
14. 上泊遺跡

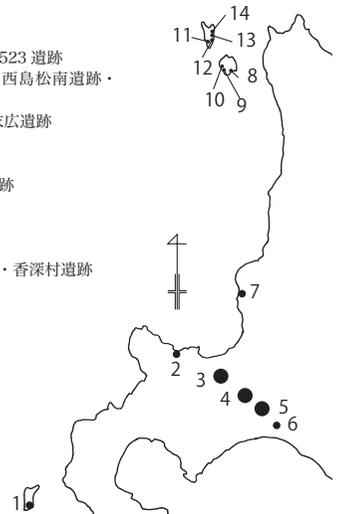


図1. 本稿で検討する遺跡の位置。

妥当性が、自ずと明らかになるであろう。それに付随して、「忘失」された様々な「物証」の再検証が、これから本格的に始まることを期待したい。

1. 「忘失」された標本と「擦文前期」土器

1) 「香深村」の厚手土器とは？(第2図)

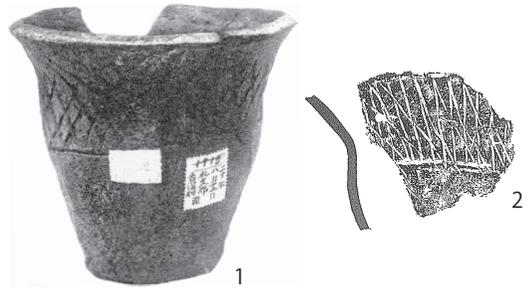
『北海道原始文化聚英』(河野, 1933)に掲載された「香深村」の厚手土器^(註2)は、誰もが周知の土器標本と言えよう。通説編年の立場では、どのように位置づけているのであろうか。私見によれば、この古き標本例には、通説の北方編年を見直す手掛かり(佐藤, 1972: 469)が伏在していると思われる(柳澤, 2013a・2014a・b, 2015c: 118-120)。

貼付されたラベルには、「1918 二十年八月十五日 礼文郡 香深村」とある。一見して厚手土器と認められよう。口径 10.2cm, 器高 11.9cm を測る。重い個体である。口唇部は隅丸で角形をなす。明確な凹線は見当たらない。口頸部には斜格子紋を幅広く施す。「直線→左斜線→右斜線」(2・3 描線)の順に描いて、その下を直線で閉じる(1 描線)。一見すると、鋸歯状紋の頂点をずらして、斜格子紋を作っているように見える(第3図1: 2013年実査)。

こうした紋様は「擦文早期」、又は「北大Ⅲ式」とされる土器群(塚本, 2007; 柿田, 2009, ほか)に由来すると考えられる。道央とその周辺域では、擦紋Ⅱ(佐藤, 1972: 468-469)や「擦文前期」後半とされる土器群に伴って検出される。1例の時期はそのように捉えられよう(→2例: 厚真村当麻内)。

それでは、その時期の斜格子紋が、なぜ厚手の「元地式」に施されているのか^(註3)。熊木俊朗氏は元地式の年代を、ソーメン紋土器終焉(「8世紀後葉」)後の「9世紀前葉～11世紀前半」に比定し、存続期間を300年間と想定している(熊木 2011: 176)。

この編年観によると、1例は何世紀に当たるのであろうか。擦紋Ⅱの斜格子紋を採用した1例は、明らかにキメラ(折衷)土器と認められる。従って、道央の擦紋Ⅱとは同時代であり、その年代は、佐藤達夫の編年案(佐藤, 1972: 464-469, 485)を斟酌すると、9世紀代に比定されよう(柳澤, 2008a: 630, 2011a: 214, 2015c: 516)。



第2図. 「忘失」された「香深村」土器と参照例。

他方熊木氏によると、「元地式」は「8世紀後葉」のソーメン紋土器(藤本 d・e 群: 藤本, 1966)を母体として、9世紀に成立したという。果たして、それは事実と言えるのであろうか。「香深村」の1例を「鍵」として、香深井5遺跡の未公表資料を検討すると、熊木氏の島嶼編年(熊木: 前出)の妥当性は、根元から揺らぐことになるであろう(柳澤, 2007b, 2008a: 246-252)。

2) 大川遺跡 JH-10 号の土器群(第3図)

小樽市大川遺跡の資料は、不思議に余り注目されていない。JH-10号の堅穴住居址(以下、堅穴と略す)からは、9世紀代における道央・道南と島嶼域との接触と交流を読み解くための、格好の資料(2～6)が検出されている(柳澤, 2014b: 29-32)。

その出土位置は覆土中であるが、型式学的にはいずれも近接した時期と見做せる。少しく観察してみよう。2例の紋様は、「直線→左斜線→右斜線」の順に描いて斜格子紋を作っており、1例と同じ手法が用いられている。ごく近い時期のものと思われる。

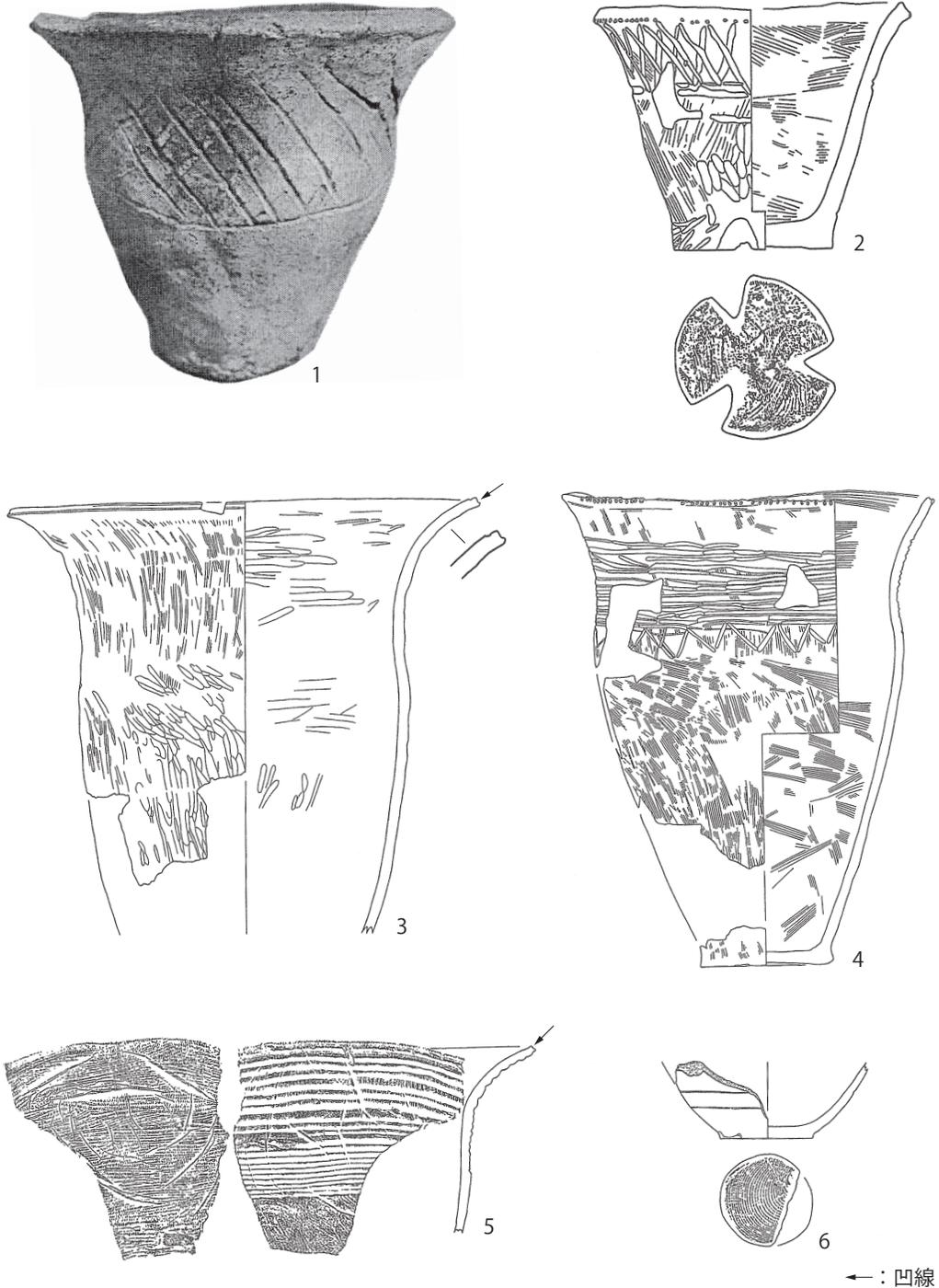
口唇部には浅い凹線が巡るようである。深い凹線は3例と5例に見える。5例の表面には縦の刻線、内面には横位のハケ目痕が見られる。4例の口端部には、短刻紋(←「截痕」)が間欠的に施される。その下には、無紋帯を介して横走沈線が巡り、鋸歯状紋が配置される。6例の胴部には、2本の沈線が施され、底部は「糸切り」処理となっている。

以上の特徴は、9世紀代とされる「擦文(前期)土器」に共通することを、あらかじめ確認しておく。

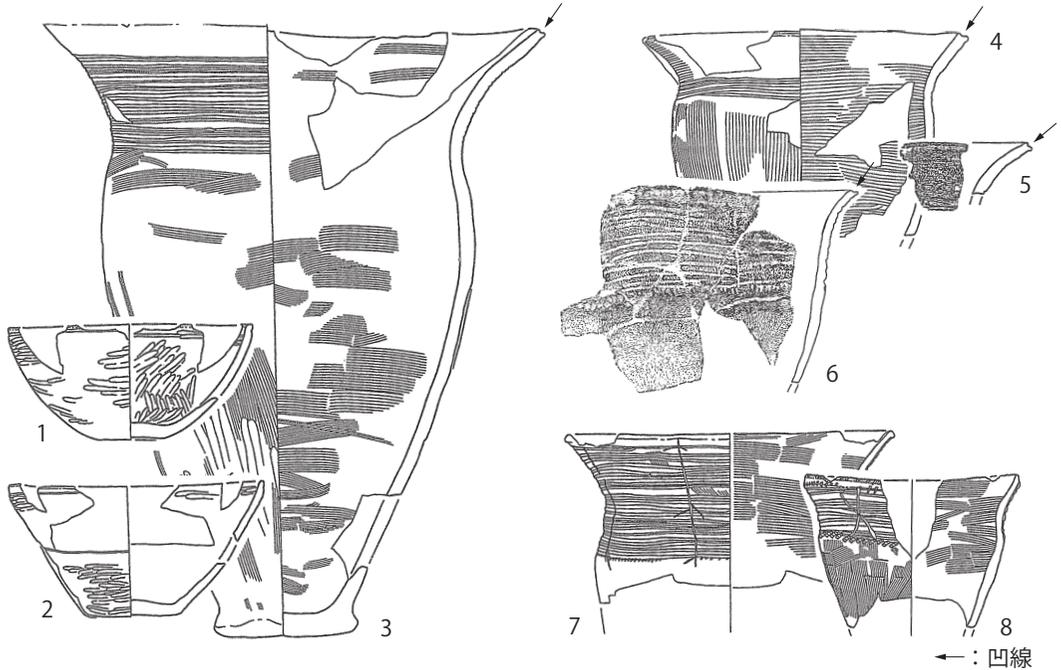
3) 誰もが認める道央「擦文土器」の標本例

道央「擦文土器」の標本例として、札幌市の代表的な遺跡の資料を取り上げ、少しく観察してみよう。

まず包含層の資料として、K523 遺跡 8a 層の土器群に注目したい(第4図)。土師器に由来する土器群(変容土師器)とともに、「誰が見ても文句のつけようのない



第3図. 「香深村」土器と小樽市大川遺跡 JH-10 号竪穴住居址土器群の対比。



第4図. 札幌市 K523 遺跡. 8a 層の土器群.

い」(大井, 2004: 373-386), 誰もが認める「擦文土器」, すなわち擦紋Ⅱ(佐藤, 1972: 468-469, 473)の良好な標本(6~8)が出土している(註4).

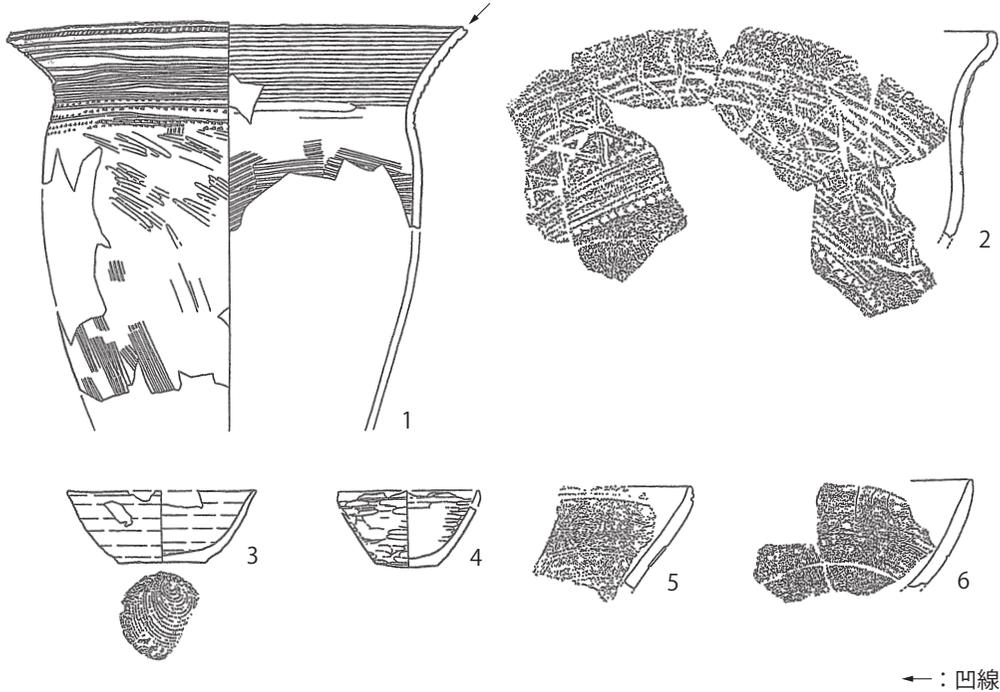
甕形の土器は, いずれも胴部に横走沈線紋を有する. 7・8例を除いて, 口唇部には溝状の凹線紋(以下, 「凹線」)が施され, 凹線には大きく深淺の二種が見られる. 内面の調整については, 掲げた資料の範囲では, 「ハケ目」が一般的である. 口唇部の凹線と「ハケ目」は, これからの観察と比較の指標として, 注目しておきたい(柳澤, 2014b: 35-56, 2015c).

坏形土器は平底である. 口端部に1本の沈線を施す(1)か, 又は細く作り出す(2). 数は少ないが, 胴部に1本の沈線を施す例もある. 器形としては, 碗形(1)と鉢形(2)の二種が基本となる. 坏形土器には, 口唇部に凹線を持つような例は存在しない. この点は凹線の手法が, 土師器と直接に関係するものでなく, 「北大式」(河野, 1958: 119-120)に由来することを(田才, 1983), 端的に示していると言えるであろう.

つぎに擦紋Ⅱのモチーフである. 6例には「針葉樹紋」の原形となる直線紋が, 7例では, それに三段の

八状紋が加えられている. 相対的には「6例→7例」の序列が想定されよう. 8例は, これらと別系統のモチーフである. 一般に「X字状紋」と呼ばれる. 北奥及び道央に分布する土師器の底部に施されており, 後者と系統的な関係があると考えられる.

擦紋土器に先行する「北大式」には, 胴部紋様を縦に分割する手法は見当たらない. 他方, 土師器は基本的に装飾モチーフを持たない. 従って, 佐藤達夫が「擦紋Ⅱ」とした「垂直沈線」(註5)(直線紋)は, 擦紋土器の系統内で創出されたと考えられる(佐藤, 1972: 468). また6~8例には, 紋様帯の下限を画する要素として, 擦紋Ⅰに由来する刺突紋(柳澤, 2006b: 55-61, 2008a: 518-523)が見える. 6例では, 刺突紋は1列であり, 全周構成されている. それに対して7例の場合は, 間欠的に施される. こうした手法は, 土師器(佐藤, 1972: 464-468)ではなく, 「北大式」の口端部に見える「截痕」(佐藤, 1972)に由来するものと考えられる(柳澤, 2008a: 213 図 20 例参照). 従って口端部への短刻紋(←「截痕」)の連続的な施紋は, 続縄紋土器を母体とする擦紋土器(佐藤, 1972: 468)の成立と変遷を捉える



第5図. 札幌市K435遺跡, D3地点19号竪穴住居址の土器群.

うえて、胴部の刺突紋とともに重要な手掛かりになると言えよう（佐藤，1972；柳澤，2006b：47-65，2008a：512-526）。

さて次の資料は、K435遺跡D3地点19号竪穴の一括土器群である（第5図）。出土の位置からみて、近接した時期のものと思われる。甕形土器の二例は、ともに口頸部に横走沈線紋が施される。1例は一帯型で口唇部に凹線を有し、2例は分帯型でそれを欠いている。

他方、短刻紋と刺突紋の扱い方は、ともに口端部に一列を施し、括れ部には二列を挿入する。ただし、それに対して2例では、2列の三角刺突紋^{（註6）}を横走沈線帯の上下に施している。上から数えると、「短刻紋・刺突紋」は3列に編成されるが、紋様帯は、斜格子紋と三角刺突紋・横走沈線紋の二帯構成となっている。

このように紋様帯を複段構成する手法は、もちろん土師器には見られないので、「北大式」の新しい土器群に由来し、「先祖返り」的に登場したものと考えられよう（柳澤：前出）。

他方、甕形土器に伴う坏を観察すると、先のK523遺跡8a層と異なる要素や特徴が認められる。まず糸

切り底（3）が注意される。また、胴部に2本の並行沈線紋を施し、内部に小さな鋸歯状紋を挿入する例（5）もある。これは北大式系のモチーフと認められ、擦紋Ⅲ期に発達する菱形紋の原形となる。B-Tm降下以前に登場した新紋様帯として、特に注目されるものである。

このような点に留意すると、K435遺跡19号竪穴の土器群は、K523遺跡8a層（第4図）より新しいと認められよう。これらは、誰もが認める9世紀代の「擦文土器」に相当する（横山，1987；小野，2000；中田，2004；塚本，2002：171-172，2007，ほか）。

2. 香深井5遺跡の複系土器群について

道央で9世紀代に比定される新しい土器群の特徴は、以上の標本例から明瞭に捉えられた。それでは、島嶼域を代表する香深井遺跡群のどの遺跡に、それらの特徴を持つ土器群が存在しているであろうか。

拠点とされる香深井I(A)遺跡には、道央的な特徴を持つ土器は稀であるらしい（柳澤，2008a：129-136，2015b：第218図）。それに対し隣接する香深井5遺跡では、未掲載の資料中に豊富に含まれている（柳

澤, 2011a : 348-355, 2011b, 2015b : 26-28).

1) 第3号竪穴の床面土器群について (第6図)

この遺跡は1995・97～98年にかけて、大規模に調査されている。1期の調査では、十和田式が主体的に出土しており、2期では、刻紋土器以降の土器群が遺構や包含層から豊富に検出されている。後者の報告書によると、第3号竪穴は「刻文期」に比定され、他の竪穴と異なり、床面の資料として1例のみが示されている(内山・熊木・藤沢, 2000 : 22-23)。

筆者が、報告用に選択された土器群を見直したところ、竪穴から出土した2例(No.144)を発見した。未掲載とされた理由は不明である^(註7)。近似の資料は、包含層から厚手系の土器に伴って出土している(前掲64図48:魚骨層I)。従って、1例を特異な存在として、端から無視するわけには行かない。

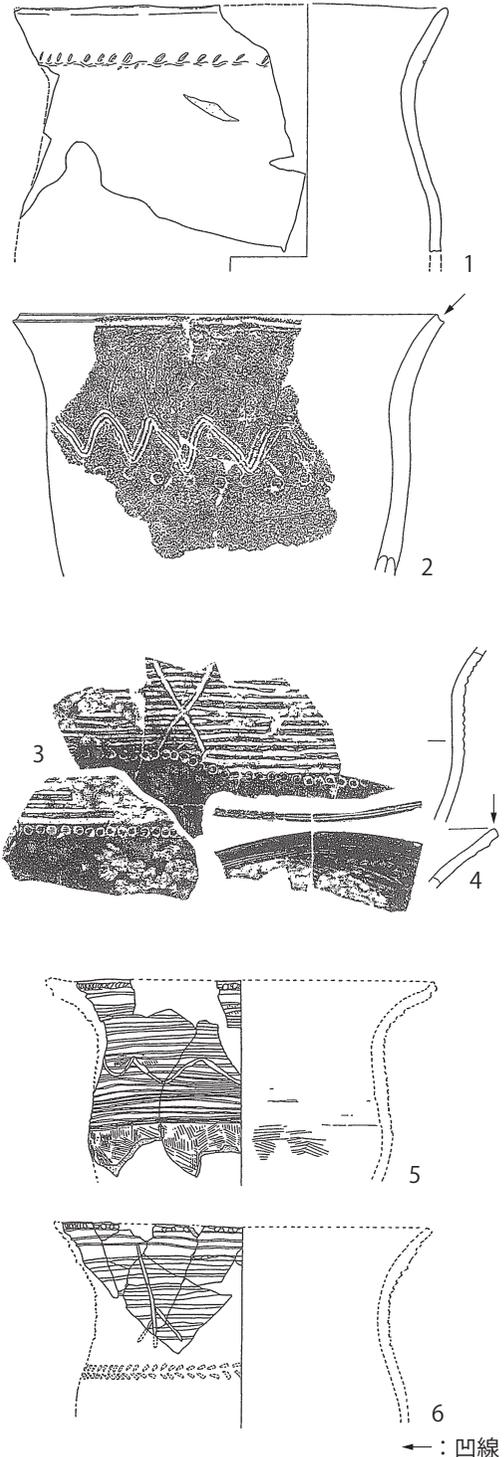
その器形は一見して、擦紋土器に似ていると認められよう。口唇部には深い凹線が巡り、胴部には竹管による鋸歯状紋が描かれる。その下にも竹管による刺突紋が裾飾りとして施されている。

その類例については旧稿で夙に引用し、編年学上の意義について検討しているが(柳澤, 2011b : 264-270, 2012 : 127-130)、等閑に附されたままである。ウサクマイN遺跡の3例がそれである。また中島松6遺跡の4例(≒5例)も、2例の鋸歯状紋と同時期のものとして扱っている(柳澤, 2009a : 209-304, 2009b)。ちなみに4例と5例(≒第4図7)は、誰もが認める9世紀代の「擦文土器」と言えよう。

さて胴部紋様帯の下端を各種の刺突紋で飾る手法は、擦紋IIにおいては、ごく一般的に用いられている。それでは2例に施された竹管紋、口唇部の凹線、さらに軽く外反した甕形の器形などは、どのように捉えるべきであろうか。

そこで3例に注目したい。その胴部紋様は、横走沈線紋に「X字状紋+竹管紋」を加えて作られている。2例は横走沈線紋を欠き、「鋸歯状紋+竹管紋」となっている。このような共通性や凹線に留意すると、2例と3例は、ほぼ同時代と見做せるであろう。

1例と2例が竪穴内で伴出し、その系統的な相関性が、道央の擦紋II(4・5)などに求められるということは、



第6図. 第3号竪穴, 床面土器と参照資料。

通説の編年体系(熊木, 2011, ほか)に照らすと、いったい何を意味するのであろうか。そこで、この年来の疑問点を解くために、旧稿(柳澤, 2011a: 348-355, 2011b)で引用した他の床面土器を、あらためて参照したい(第7図)。

図示したのは、1998年8月4~5日に「床面」で検出されたものである。その組成は4日から

- (1) 擦紋Ⅱ(1)
- (2) 刻紋土器A(4・5)
- (3) 元地Ⅰ式^(註8)(9)

となり、5日でも同じように観察される。

- (1) 擦紋Ⅱ(2・3)
- (2) 刻紋土器A(6)
- (3) 元地Ⅰ式(10)

つまり報告書では、これら三系統の土器群のうち、(2)類の完形品(第6図1)1点を提示して、堅穴の時期を単純に「刻文期」と規定しているわけである。先に引用した熊木俊朗氏の編年観も、こうした資料操作を前提条件として、おそらく検討されているのであろう(熊木, 2000a・b, 2011: 175-197)。

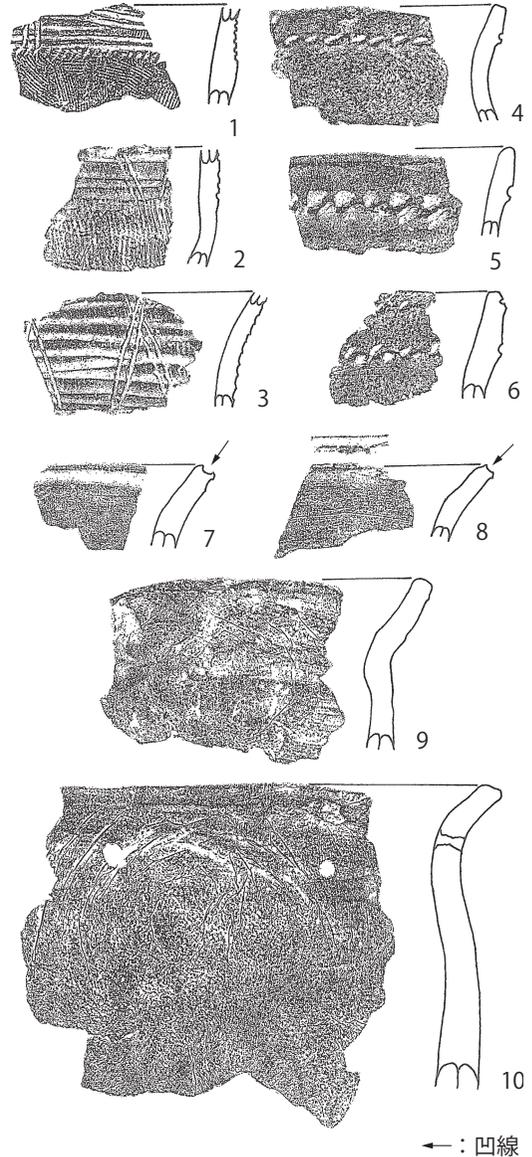
(2)類の4~6例のみを堅穴に伴うものと判断するには、床面から二日に亘って同じ組成で出土した(1)・(3)類の土器群を、一様に「混在」扱いにする必要があろう。しかし、そのような記述はどこにも見当たらない。土器編年を担当した熊木氏は、先に示した1例(第6図2)に見える、凹線や竹管紋・鋸歯状紋と道央「擦文前期」土器との関係性をどのように捉えて、他の床面資料(第7図1~10)とともに、報告書への掲載を見送ったのであろうか(柳澤, 2014b: 75; 註8)。

その点は、埋土資料についても言えることであるが、後節であらためて触れたい。次に第3号堅穴の西隣へ移動して、さらに細かな分析を続けよう。

2) E20・21区における土器組成(第8図)

第3号堅穴はD21~23区に跨り、E列では、21~23区にかけて構築されている。出土した遺物は、基本的に床面と埋土、それより上位、又は下位の包含層(文化層「Ⅰ・Ⅱ、Ⅲ層とされる」^(註9))の三者に区分され、そのとおりに資料が掲載されている。

従って、E20・21区資料(1~30)の大半は、



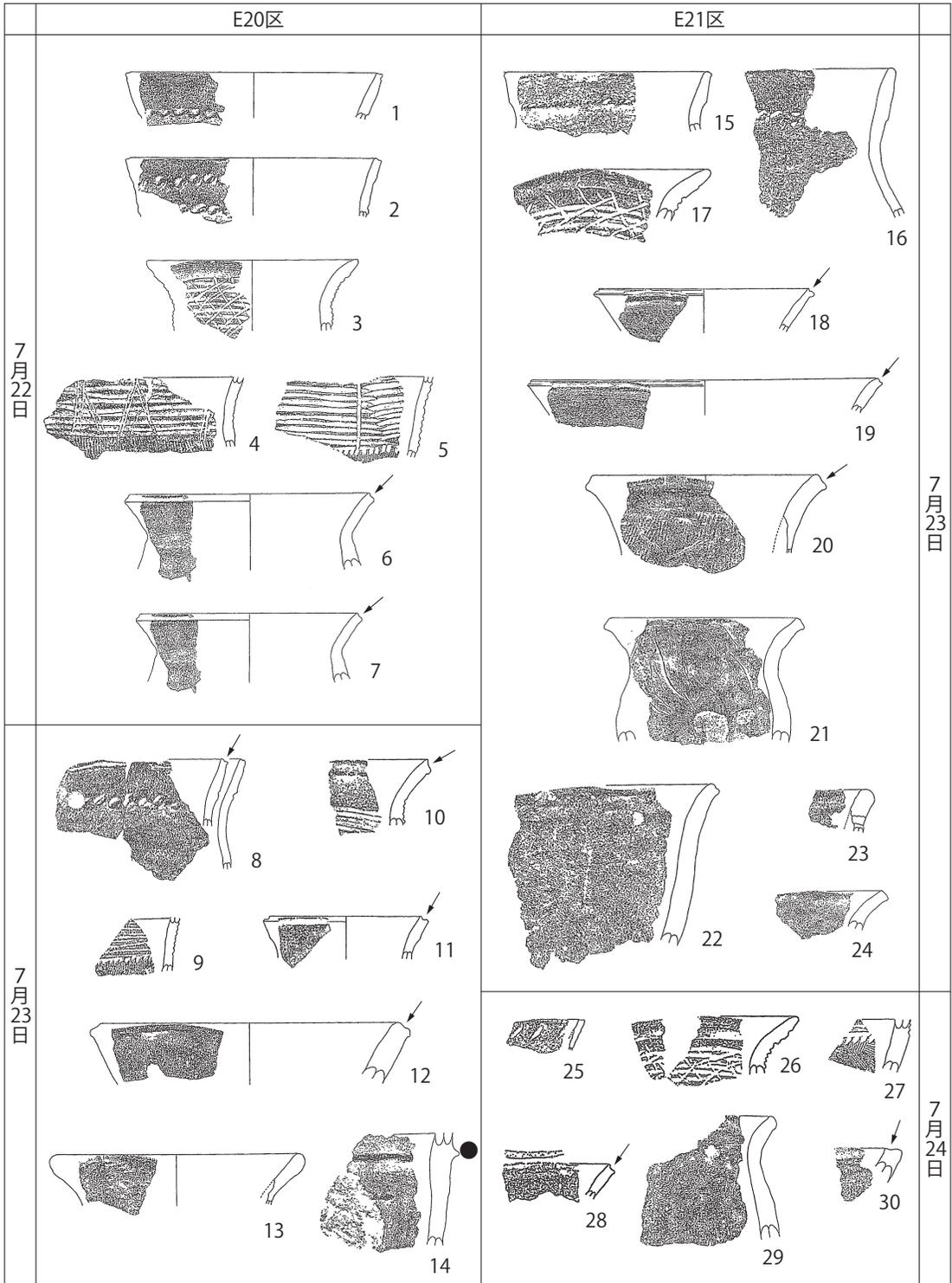
第7図. 第3号堅穴. 床面土器の組成.

その内容からみて、第3号堅穴の床面土器に対比され、本来は「Ⅱ」とされる文化層に相当するものと推定される。日付順に出土状況を見ると、E20区の7月22日では、

- (1) 刻紋土器A(1・2)
- (2) 擦紋Ⅱ(4, 5 ≡ 第4図6)
- (3)(2)に伴う凹線を有する素紋の土器(6・7)

23日では、次のような組成を示す。

- (1) 口唇に凹線を有する刻紋土器A(8)



●：突帯 ←：凹線

第8図. 日付順に見た E20・21 区における出土土器群の組成.

- (2) 横走沈線紋の擦紋Ⅱ(9), その模倣土器?(10)
- (3) 口唇に浅い凹線を施す元地Ⅰ式(12・13)
- (4) 口頸部に突帯を施した元地Ⅰ式(14)

という組成が認められる。

こうした安定的な伴出状況は、果たして偶然なのだろうか。次に、第3号・第5号竪穴の間に位置するE21区の包含層に移りたい。

7月21～24日に亘る資料と、28日と8月7日付の「Ⅲ層」資料の二者が存在する。21・22日の資料では、擦紋Ⅲを伴う元地Ⅱ式が主体を占める。23日に入ると、明確な擦紋Ⅲは姿を消し、代わって擦紋Ⅱが現れて、元地Ⅰ式が主体となる。24日も同じ傾向を示す。「Ⅲ層」に比定された28日の資料では、熊木編年によると7世紀代の刻紋土器Aと、9世紀以降に比定される「元地式」が併存することになる。

報告書では、このような「混在」状況についての具体的な検討はなく、サハリン島を視野に入れつつ、熊木編年の妥当性が、セリエーション編年法を用いて検討されているのである(熊木, 2000a・b, ほか)。

さて実査した未公表資料のうち、E21区では23・24日出土の代表例を示した。旧稿で引用したものを選択し、若干の資料を補っている。その内容をあらためて確認すると、23日は、

- (1) 刻紋土器A(15・16)
- (2) 擦紋Ⅱ(17)
- (3) 擦紋Ⅱに伴う凹線を施すもの(18・19)
- (4) 厚手またはやや薄手の元地Ⅰ式(20～24)

という組成を示す。20例には縦位の刻線状の調整痕が見られ、凹線と合わせて、擦紋Ⅱからの影響が看取される。双方の特徴を持つ大川遺跡のJH-10号の一例(第3図5)を参照すると、「元地Ⅰ式」と「擦紋Ⅱ」の同時性が端的に捉えられる。

続いて24日も、

- (1) 刻紋土器A(25)
- (2) 擦紋Ⅱ(26・27)
- (3) 擦紋Ⅱに伴う凹線を施すもの(28)
- (4) 厚手の元地Ⅰ式(29), 浅い凹線を持つもの(30)

という組成が認められる。

このように若干の違いはあるものの、23・24日の土器群は、近接した時期のものと思倣せる。先の第3号

竪穴の床面資料(第6・7図)とも、ほとんど変わらない。この事実は、いったい何を意味するのであろうか。

さてE20・21区では、擦紋Ⅱに伴う凹線を施した甕形土器が目立って検出されている(第8図6・7・11, 18・19・28)。その影響は8例に見えるように、なぜ刻紋土器Aの口唇部に現れているのであろうか。凹線は、擦紋Ⅱに由来する要素である。従って8例の刻紋土器Aは、擦紋Ⅱとの同時代性を端的に物語るキメラ(折衷)土器と認められよう。

熊木氏の編年観に従えば、E20区から検出された土器群は、①7世紀代(前半～後半)の刻紋土器と、②9世紀～10世紀前葉とされる擦紋Ⅱ、そして、③9世紀前葉から11世紀前半とされる「元地式」が、数日間に亘って「混在」して出土したことになり、E21区や第3号竪穴の床面でも、同様の状態であったと捉えることになろう。

果たして、そのような事が在り得るであろうか。こうした疑問点を解き明かすために、次に第5号竪穴と、その周辺に移動して、「元地式」に見える異系統の要素について、少しく検討してみたい。

3) 「元地式」における突帯の出現(第9図)

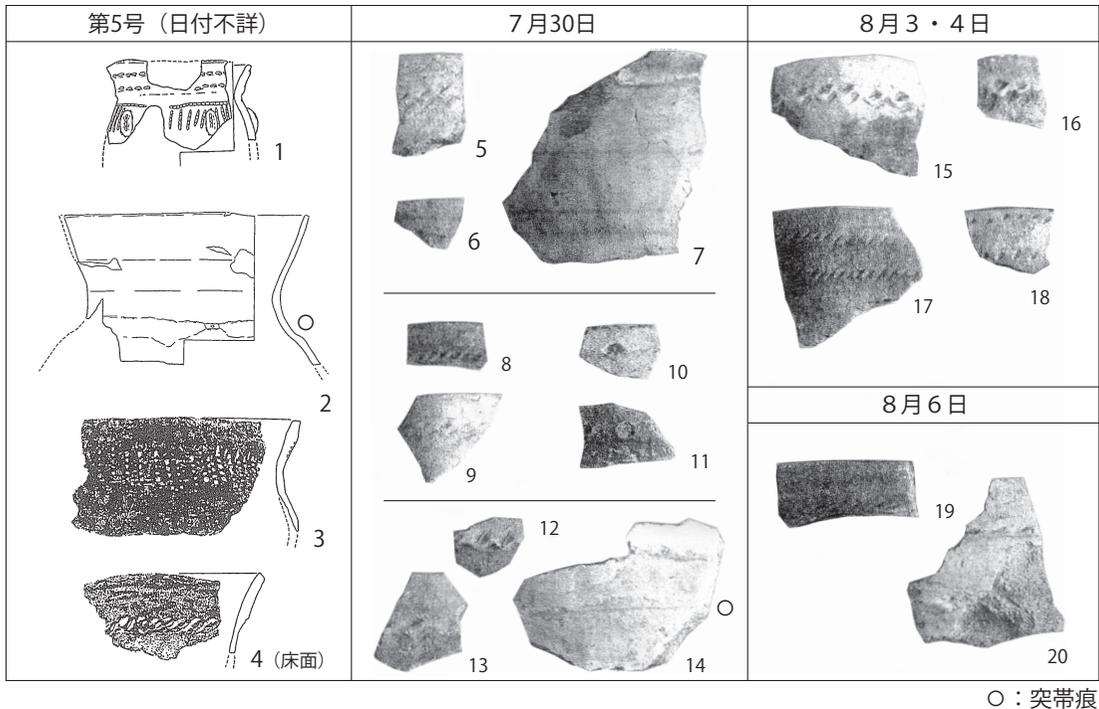
「元地式」は謎の多い土器である。発掘調査で検出され(大井, 1972)、大方に注意されてから半世紀を超えて、いまだその成立母体も、変遷も、ほとんど不明の状態にあるように思われる。

元地Ⅰ式に顕著な要素としては、「突帯」・「スタンブ紋(型押紋)」・「摩擦式浮紋」・「厚手の器壁」などが挙げられよう。これらが登場する事情についての詳細な検討は別の機会として、ここでは刻紋土器Aと元地Ⅰ式の同時代性に論点を絞りたい。

先に凹線に注意して、擦紋Ⅱと刻紋土器Aの接触に伴うキメラ現象に着目したが、「突帯」についてはどうであろうか。報告書には第5号竪穴から出土した興味深い刻紋土器Aが掲載されている。

第9図の2例である。この竪穴は「十和田式期」とされており、本例は埋土から検出されたという。他にも、1例や3例の仲間が豊富に出土しており、その一部(4)は床面から発見されている。

2例を少し観察しよう。実査の際に初めて気づいた



第9図. 第5号竪穴住居址とその周辺における「突帯」を伴う土器群の出土状況。

が、肩部には元地1式に見られる「突帯」(第8図14例を参照)の脱落痕が観察された(●印)。同様の資料は、埋土中の元地1式にも第9図14例として確認される。そこで日付順に資料を観察すると、まず1998年の7月30日では、

- (1) 刻紋土器A (5・6, 8・9, 12・13)
- (2) 「突帯」を持つ元地1式 (7, 11, 14)

という組成が認められる。

続いて8月3・4日と6日では、図示のごとく刻紋土器Aのみが検出されている。7月30日～8月6日に出土した刻紋土器Aは特徴が似ており、同時期のものと捉えられる。従って第5号竪穴の埋土中では、明確な擦紋IIを欠いているが、「元地1式」と「刻紋土器A」は併存していると認められよう。

とりわけ、元地1式の「突帯」を採用した2例ごときメラ(折衷)土器が存在することは、「刻紋土器A」と「元地1式」の同時代性を、端的に示唆していると考えられる。2の類例は、礼文島では香深井1(A)遺跡、利尻島では利尻富士町役場遺跡において検出されている(註¹⁰)。

では、「擦紋II」と「元地1式」の関係性はどうか。第1・3号竪穴の周囲に移動して、さらに分析を続けよう。

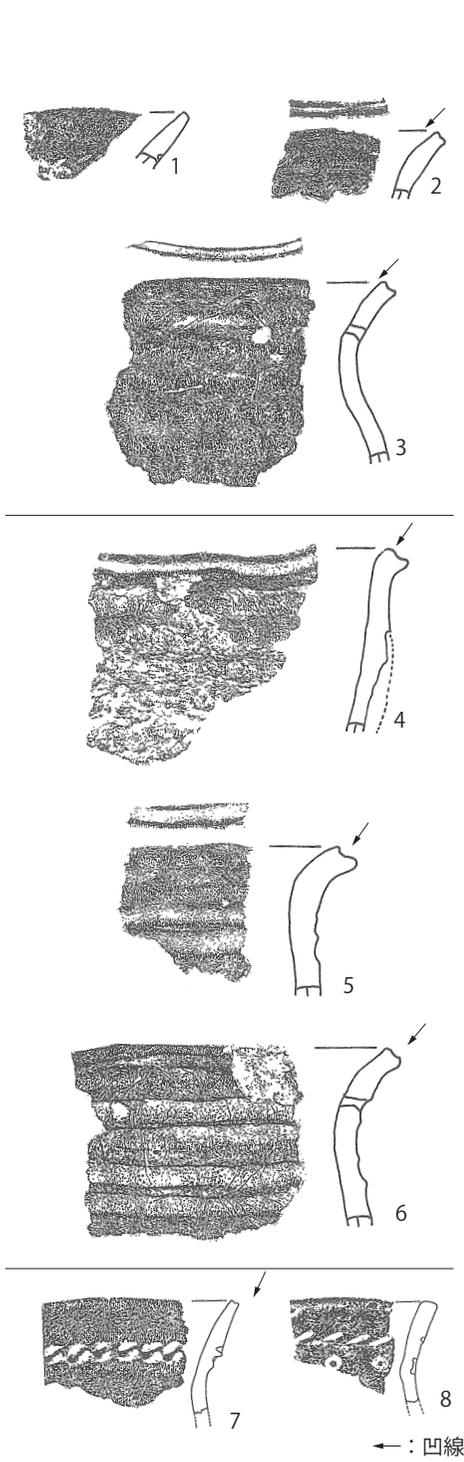
4) 口唇部の凹線手法と「元地式」の関係

先に擦紋IIに由来する口唇部の凹線が、稀ながらも、刻紋土器Aに認められると指摘した(註¹¹)。

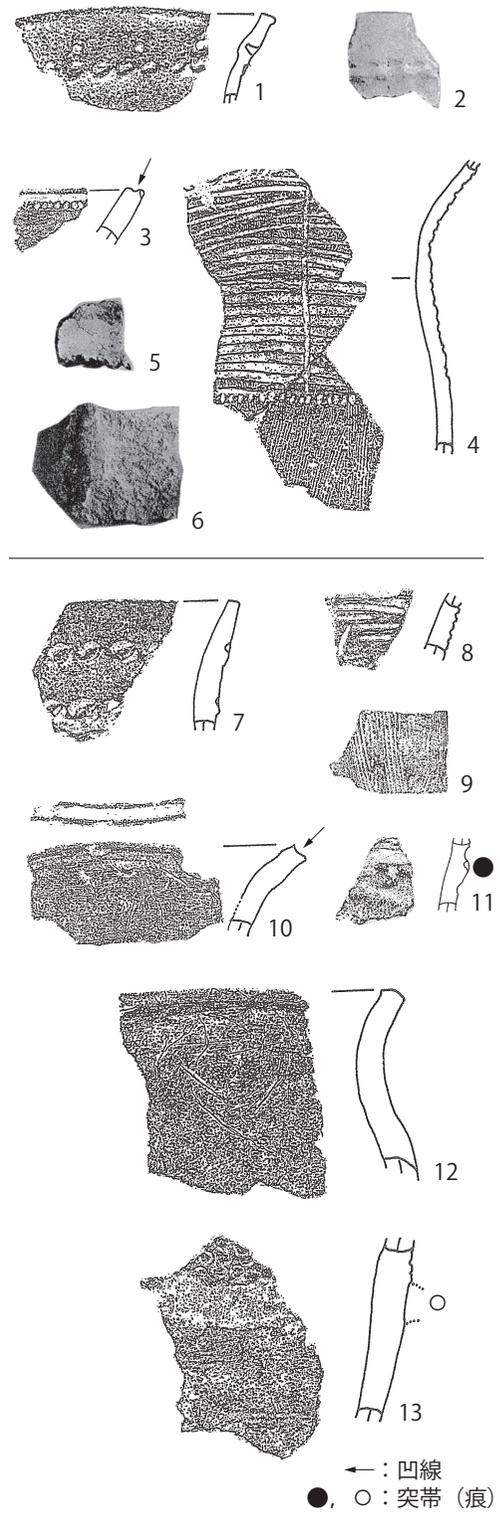
この手法が元地1式にも見られるならば、第3号竪穴(床面)やE20・21区、そして第5号竪穴の埋土における「刻紋土器A」と「擦紋II」、「元地1式」の併存状況は、時期的な「共伴」関係を示す可能性が高いと判断されることになろう(第10図)。

そこで、凹線を施した元地1式を求めると、第3号(D21区:1～3, D22区)や第1号(E26区:4・5)竪穴、「香深村」などで好例が見いだされる。後者は別の機会とし、D21区の資料に注目したい。

1例は刻紋土器A、2例は擦紋IIに伴う凹線を施す例である。他方3例は、その凹線を採用した中厚手の元地1式と認められる。1・2例は、7月28日に出土しているが、3例の日付は不明である。



第10図, D・E区における口唇部凹線土器の変遷.



第11図, F19区における土器群の組成.

これらに対し E26 区の 4 例と 5 例は、一見して特徴が異なると認められよう。まず器壁が一段と厚くなり、それに伴い口唇部の凹線も幅広く作出されている。5 例の頸部には、指撫でによると思われる凹線が 2 本引かれており、摩擦式浮紋に似た効果を示している。

2～4 例に対して、D22 区の 6 例では、口頸部に 4 条の摩擦式浮紋が施されている。この種の資料は安定的に擦紋Ⅲを伴うので、元地 2 式に比定される。

このような観察をふまえると、凹線を持つ土器とそれに関連する資料の序列は、

- (1) 刻紋土器 A (1 ≡ 7) = 擦紋Ⅱの凹線土器 (2)
= 中厚手の凹線を施した元地 1 式 (3)
- (2) 厚手化した凹線を有する元地 1 式 (4)
- (3) 頸部に指押しによる凹線を有する元地 1 式 (5)
- (4) 摩擦式浮紋を幅広く施した元地 2 式 (6)

という流れでスムーズに捉えられる。

3～5 例の元地 1 式は、この編年序列をふまえると、擦紋Ⅱとの接触に由来するキメラ(折衷)土器であると、容易に認められよう。かくして両者の同時代性は、もはや容易に疑えない水準に到達したのではなかろうか。さらに遺跡内での分析を続けたい。

5) F19 区における土器組成

この区は、第 5 号竪穴の西側に位置しており、竪穴の西壁とごく一部が重なる。従って大半の資料は、包含層から出土していると推測される(第 11 図)。未掲載の資料では、日付不詳のもの(1～6)と 7 月 10 日(7～13)の二者が「非選択」のビニール袋に入っていた。その内容はこれまでと特に変わらない。

- (1) 刻紋土器 A (1・2・7)
- (2) 擦紋Ⅱ (4・8・9)
- (3) 擦紋Ⅱに伴う凹線を有するもの (3・10)
- (4) 元地 1 式 (5・6・12・13)

13 例に注目すると、口頸部には竹管状の工具による刺突紋が施され、その下に「突帯」の脱落痕が見える。これは先の「突帯」を有する刻紋土器 A (第 9 図 2) に対比される。本例もまた、「刻紋土器 A」と「元地 1 式」の同時代性を示唆する有力な一例となろう。

ところで、口頸部の竹管紋は「十和田式」にも存在する。通説編年では、これをどのように説明するのであ

ろうか。「十和田式」と「元地式」の関係を見直せば、自ずとその解答が得られるであろう。

6) F21 区における土器組成

この区では、5 月 22・28 日と 7 月 21～24 日に興味深い資料がある。代表例を第 12 図に示した。

これらには一見して、擦紋Ⅱ・Ⅲと元地 1・2 式が不自然に出土していると観察される。他方、広義の「北大Ⅲ式」(鈴木, 2003; 塚本, 2007; 柳田, 2009: 49, ほか)・擦紋Ⅰや「十和田式」などは、一例も見当たらない。おそらく電話幹線の敷設工事や遙か以前の攪乱などに伴い、新旧の土器群が混在しているのであろう。その内容を検討すると、混在に左右されることなく、本来の組成が以下のように読み取れるであろう。

- (1) 刻紋土器 A ? (11)
- (2) 擦紋Ⅱ (1)・擦紋Ⅲ (4・5・9 ?)
- (3) 擦紋Ⅱ又はⅢに伴う凹線を有するもの (3・13)
- (4) 元地 1～2 式 (2・6・8・10・12)

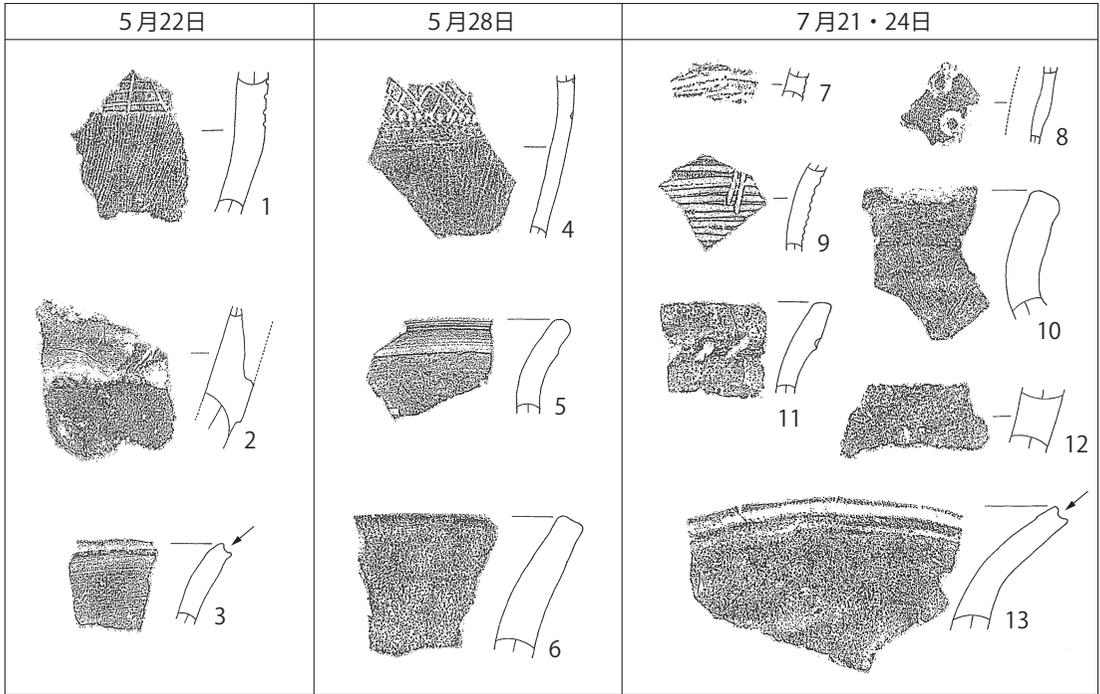
5 月 21 日の資料にも、擦紋Ⅱ・Ⅲと元地式が混在しており、それ以前が「文化層Ⅰ」に当たると推定される。それらは元地 2 式と擦紋Ⅲを組成し、ソーメン紋土器(「藤本 d・e 群」)を含まない新しい土器群である。

7) D23～25 区における土器組成

次に、第 1 号・第 3 号竪穴の間に分布する包含層の資料を検討してみたい。D23～D25 区がその中心域となる(第 13 図)。

報告された資料としては、3 例^(註 12)・4・6 例, 9 例^(註 13), 10・12 例などがある。その他は未掲載のものである。その内の 2 例は「十和田式」に属す可能性がある。他方、口端部の隆起線に「クマの足跡」のスタンプ紋を施す 12 例は、刻紋土器 A の影響を受けて作られたものと考えられる(柳澤, 2012: 127-130, 2015c: 267-269)。

3 例は横走沈線紋を施し、それに竹管紋を加えている。これは擦紋Ⅱに伴う 1 例(≡ 7 例)と「十和田式」(2) が接触して創出された、一種のキメラ(折衷)土器であると認められる。本例もまた、双方の同時代性を示す好例であると言えよう(柳澤, 2007b, 2008a: 249-



第12図. 日付順に見たF21区における土器群の組成.

252, 264-269).

次に4例である。これは口頸部が括れて、口縁が外反する器形を呈する。肩部には、指押による楕円紋（古い要素）が二つ並んでいる。斜傾した口端部はやや下膨れ、そこに小ぶりの刺突紋が施される。

D24区の8・9例では、口端部がやや広くなり、そこに横位の刻紋が施される。その紋様構成は、「十和田式」系の突き瘤紋を施した6例の刻紋土器Aに良く似ている^(註14)。6例を母体として、8・9例のような元地1式の模倣土器が作られたならば、4例の母体も刻紋土器Aに求められよう。この仮説は、すでに旧稿で触れている（柳澤, 2011a: 264-270, 2012, 2014a: 194-195）。

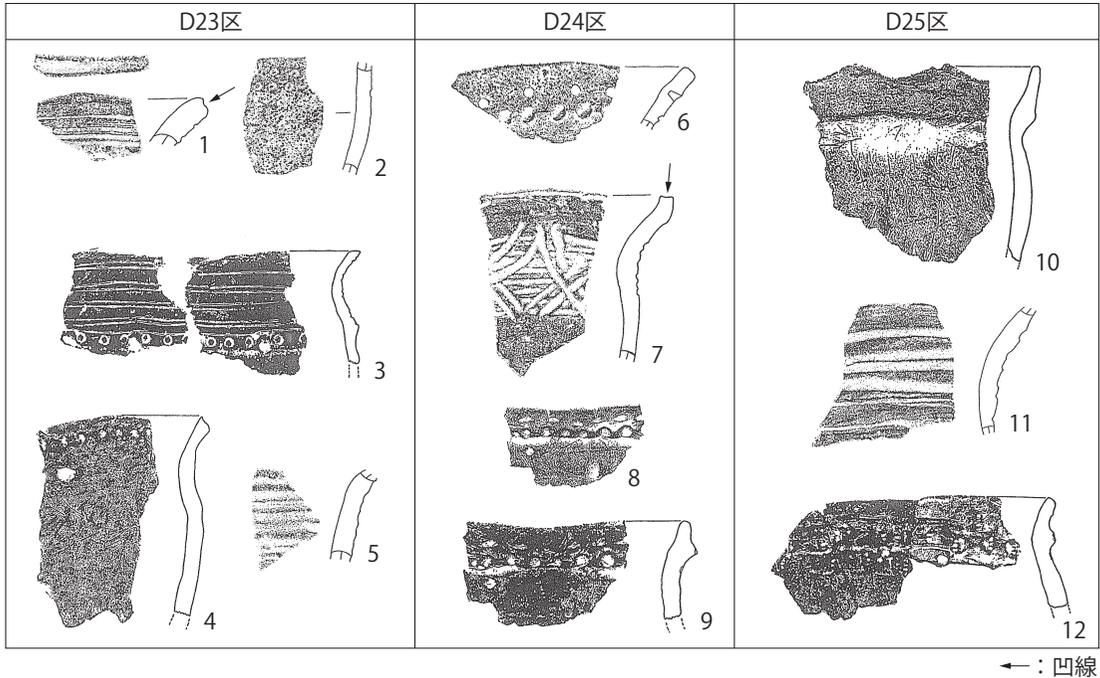
模倣土器と思われる資料として、奇妙な波状口縁を持つ10例が挙げられる。刻紋土器Aが多量に出土した香深井1(A)遺跡には、このような土器は見当たらない。波状縁の由来は判然としない。しかし、規範外れの10例を作り出したのは、刻紋土器Aの影響を受容した元地1式の側であると想定すれば、奇妙な口縁部の形態は理解し易くなるであろう。

「突帯」を持つ刻紋土器Aとともに、10例の「模倣土器」からも、「元地1式」と「刻紋土器A」の同時性が、あらためて傍証されたと言えよう。

続いて、先に触れた12例の位置づけである。「クマの足跡」のスタンプ紋は、いつ頃、どこに登場し、どのようなプロセスで、サハリン島から千島諸島に及ぶ広大な分布圏を形成したのであろうか。この問いは重要な問題を孕むが、1972年以来、環オホーツク海域編年が混乱しているため、なお解決への糸口が見出せない状態にあるように思われる。

この問題を解くうえで、12例の位置づけは重要な意味を持つと予想される。それは「摩擦式浮紋」の発生とその広域拡散を、サハリン島を視野に入れつつ、どのように捉えるかという課題と密接に関連して考えると考えられる。佐藤達夫の示唆に富む見解が（佐藤, 1972: 479-485）、良き導きとなるであろう（柳澤, 1999: 51-52・93-94, 2008a: 629-631, 2011b: 332-336, 361-369, 2015c: 516-517）。別の機会を俟って詳しく検討したい。

さて12例自体は、遺跡内でどのように登場したので



第13図. D23～25区における出土土器群の組成.

だろうか. 資料の範囲でその変遷をたどると,

- (1) 刻紋土器 A の模倣土器としての 4 例の登場
- (2) 同じく刻紋土器 A (6) の模倣土器としての 8・9 例の創出 (実例に乏しい稀な存在)
- (3) 刺突紋を「クマの足跡」スタンプ紋に置換する操作を行う (12)

という流れが想定される。「I・II」文化層の元地 2 式では、口唇部や胴部に盛んに「クマの足跡」を模した各種のスタンプ紋が多用される。その点に留意すると、12 例は元地 1 式ではなく、元地 2 式の初頭に下るとした方が、あるいは良いのかも知れない。

いまだ本例と関連する材料に乏しく、この見方は消極的な一つの可能性としておき、資料の充実を俟ってあらためて検討したい。

8) C26・D26～29区の出土土器群 (第14図)

第1号竪穴は、D26区を中心にC26・D25・27区に跨っている。その周囲からD28・29区に至るまでには、新しい元地1式の広がりが見られる。

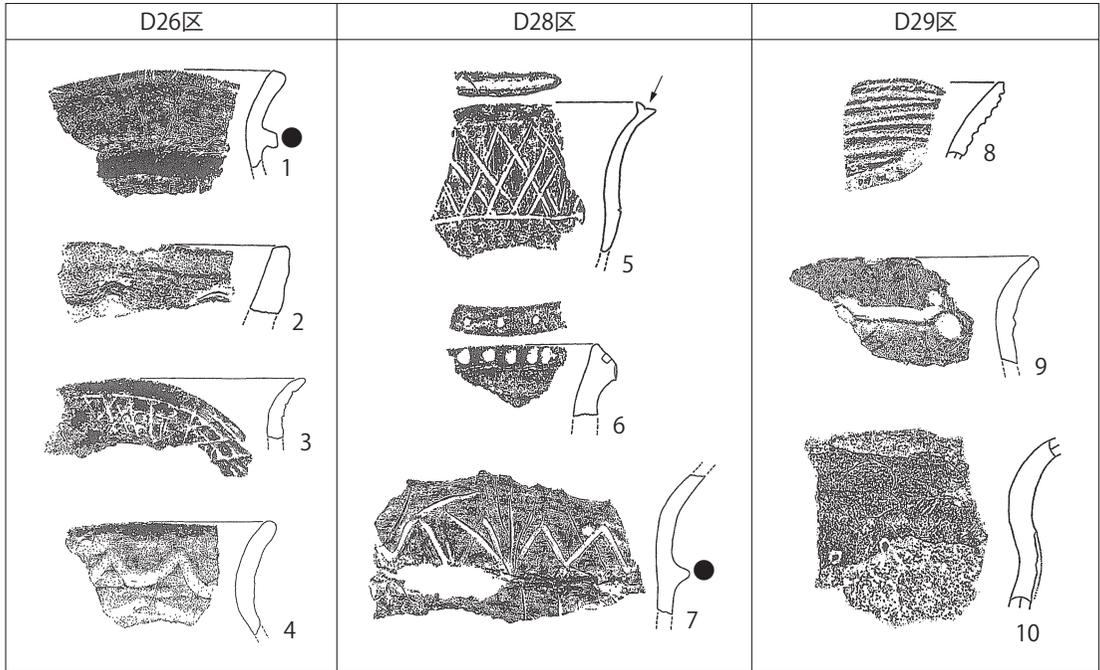
第14図の資料は一見して、これまでの資料と異なる特徴が観察されるであろう。例えば4例と9例、そ

して2例である。これらの原形となるのは、刻紋土器 A を模倣して作られた口縁部に刺突紋を施す土器 (第9図10) である。それから刺突紋の周囲が盛り上がる2例へ、さらに指押しで口縁部の下端をなぞる9例へ、そして刺突紋を除いた4例への変化が、型式学的には想定される。4例に現れた鋸歯状紋は、他の資料を参照すると、胴部から転写されたものと考えられる。先に引用した資料では、第6図2例が、そうしたモチーフと系統的に関係する一例として挙げられる。

さてD26区において、第14図3例のような擦紋II (末)期の斜格子紋が出土していることは、非常に暗示的である。これと伴出した2例の時期も、ごく近接していると考えられる。

この両例に対比される資料は、D28区から6例や7例 (報告では紋様が逆位) とともに検出されている。これは単なる偶然ではあるまい。5例の口唇部には凹線が施され、胴部には頂点をずらした斜格子紋が見える。5例は、鋸歯状紋を直線で画す3例 (≡ 第2図1) の直前に位置するものと思われる。

次に小破片ながら、6例も興味深い資料である。これは口端部に刺突紋を持つ土器 (第13図4) に後続



第14図. D25～29区における出土土器群.

すると考えられる。ただし口唇部には、小さな刺突が加えられている。元地2式になると、この部分には盛んにスタンプ紋が施される。本例は、その直前（擦紋Ⅱ終末期）に位置するものであろう。従って1例や5例と、ほぼ同時期に比定される。

このように比較すると、以上の土器群を出土した区では、刻紋土器Aが欠落していることに気づく。末期の刻紋土器Aは、確かに香深井1(A)遺跡には豊富に存在するが、香深井5遺跡には少ないように見受けられる。その理由は判然としないが、一つの仮説としては、元地系集団に対する擦紋Ⅱの影響が末期に強まること、何らかの関係があるように思われる。

3. 香深井5遺跡編年の検証

以上、論点は多岐に亘り、資料の分析は煩瑣で複雑なものとなったが、ようやく、新著の編年体系を精密化するための編年仮説を、あらためて提示する地点に到達したように思われる。ここでは、その妥当性を三つの観点から検討してみたい。

1) 元地1式のキメラ(折衷)土器(第15図)

E23区の包含層からも、興味深い資料が出土している。1例は、肥厚した厚手の口端部に小さな刺突紋を施し、胴部に斜格子紋を描く資料である。また、2例の口縁部には刺突紋が見える。3例では小さな刻紋が施される。全周扱いのタイプであろう。

刺突紋の扱い方からみて、2例は古手のものと考えられる。それに対して1例と3例では、紋様要素が全周扱いされており、新しい時期に比定される。1例に見える斜格子紋と小さな刺突紋は、先のD28区の資料(7・8)に由来するものであろう。本例の斜格子紋は崩れているが、一見して、擦紋Ⅱの4例や厚手系の8例と密接に関連することが了解されよう。

斜格子紋に関しては、「4例→7例→1例」という相関的な変遷が指摘される。紋様要素については、口端部において、「4例→8例→1例」の関係が認められる。ただし、刺突紋の施紋は間欠タイプ(4)と、全周タイプ(1・8)で異なる。擦紋Ⅱの新しい時期では、全周するタイプ(→3例の登場)が一般的である。従って1例と3例は、その施紋手法の影響を受けていると考えられる。

そのように観察すると、口端部の施紋において、1・8

例と3例、4例と6例の間には、斜格子紋や凹線(7)とともに密接な相関性が認められる。そこで6例に見える、横走洗線の下端に施された鋸歯状紋にも注目したい。

このモチーフの由来は、遙かに「北大式」に辿れるから、非常に長命なモチーフだと言える。この種の鋸歯状紋は擦紋Ⅲにも継承される。施紋される部位は異なるが、元地1式(1例≒8例)にも存在する。その点は、先に引用した資料のとおりである(第14図3・5)。擦紋Ⅱに見える様々な要素が、香深井5遺跡に集中して現れていることが理解されよう。

以上、キメラ(折衷)土器の1例から、「擦紋Ⅱ」と「元地1式」の同時代性が、さらに有力な裏付けを得たと言えるであろう。

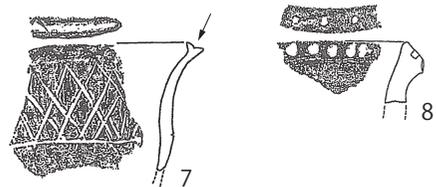
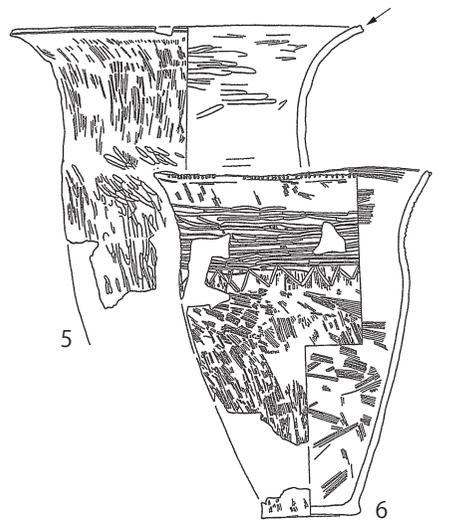
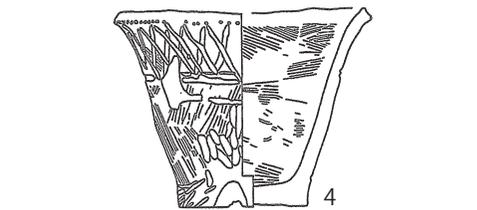
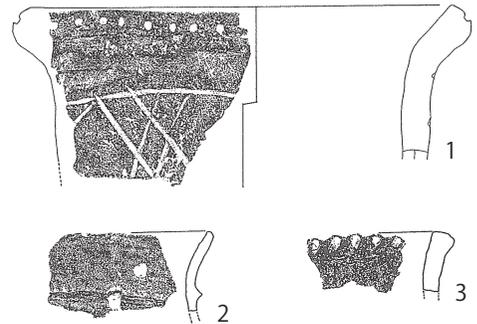
2) G18区における未報告の層位事実

報告書によると、「Ⅲ層」の時期は「十和田期」とされ、「Ⅱ層」が「刻文期」に比定されている(内山・熊木・藤沢, 2000)。しかしながら、未公表の資料を利用したこれまでの分析によると、「刻紋土器A」は大部分の包含層において、「擦紋Ⅱ」や「元地1式」を伴うことが明らかになったと考えられる。

「Ⅲ層」、あるいは「Ⅲ層扱い」の資料を一覧しても、こうした傾向は変わらない。実は、「Ⅱ層」と「Ⅲ層」とされた土器群の組成が、どこでも単純に異なるわけではない。筆者の悉皆的な見直しによると、同一組成の「Ⅱ層」・「Ⅲ層」がある一方で、別の組成を示す「Ⅱ層」・「Ⅲ層」も確実に存在するのである。そうした一例として、G18区の資料を参照したい(第16図)。その内容は次のとおりである。

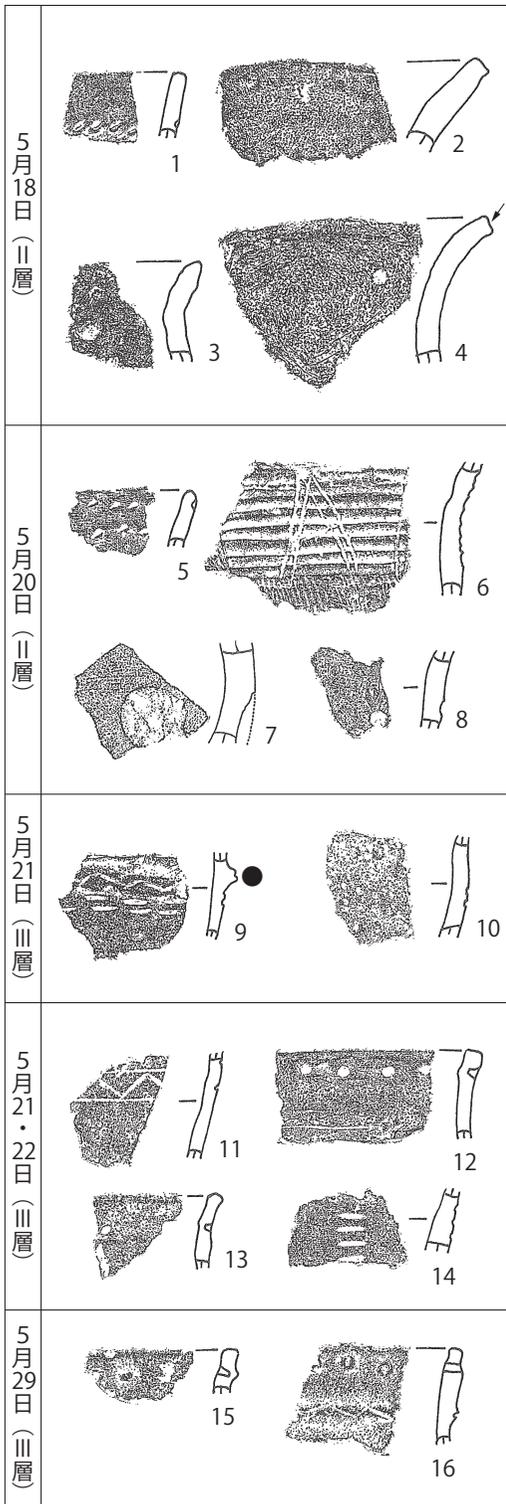
- (1) 刻紋土器A(1) = 元地1式(2~4) : Ⅱ層
- (2) 刻紋土器A(5) = 擦紋Ⅱ(6) = 元地1式(7・8)
- (3) 「十和田式」(9・10) : Ⅲ層(8) : Ⅱ層
- (4) 「十和田式」(11~14) : Ⅲ層
- (5) 「十和田式」(15・16) : Ⅲ層

複系統の土器が併存する(1)・(2)類と(3)~(5)類に見える差異は、誰の目にも疑いないと映るであろう。本区の資料は、(1)・(2)類が「十和田式」に後続すること、そして、擦紋Ⅲと元地2式には先行することを、一目瞭然に示していると言えよう。このような明白な層位事実が、なぜ香深井5遺跡編年の検討に際して、



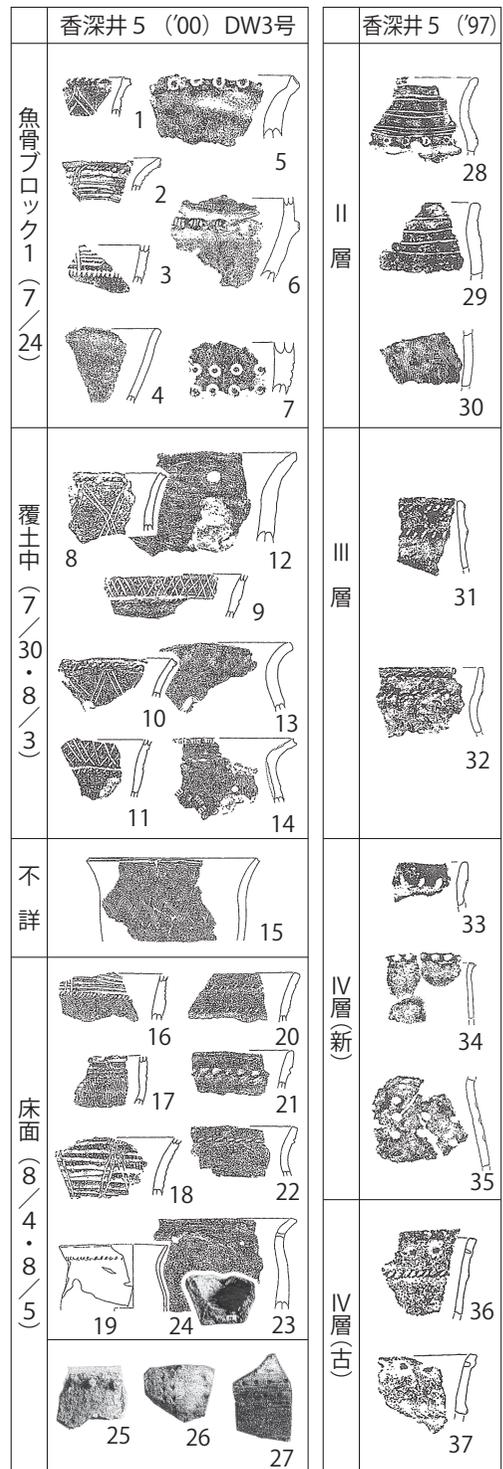
← : 凹線

第15図. E23区のキメラ(折衷)土器と参照資料。



●：突帯

第16図、日付・層位順に見たG18区の土器変遷。



第17図、香深井5遺跡における新旧「層位事実」の対比。

等閑に附されたのであろうか（熊木，2000a:151・b，柳澤，2014b：註8）。

3) 香深井5遺跡における新旧の「層位事実」

香深井5遺跡の調査は二期に亘って実施され，その報告書も速やかに刊行されている（種市・内山・荒川，1997：内山・熊木・藤沢，2000）。

「十和田式」の良好な資料を多量に出土した最初の調査では，文化層は層位的に「第Ⅱ～Ⅳ層」と区分された。出土した土器群の変遷は，型式学的な分析を加えると，次のように捉えられる（第17図）。

- (1) 各時期の「十和田式」（36・37ほか）
- (2) 刻紋土器A（33）・「十和田式」に由来する新しい土器（34・35）
- (3) 刻紋土器Aの新しい土器（31・32）
- (4) 元地1式？の新しい土器（28・29）・擦紋土器の小片（30）

この層位序列とG18区の層位事実をふまえて，第3号竪穴床面，埋土，包含層の土器群（'97・'98）を，層位・日付順に編年すると，次のように整理される。

- (1) 床面上で混在している「十和田式」（25～27）
- (2) 床面上で併存する土器群（擦紋Ⅱ：16～18，刻紋土器A：19～22，元地1式：23・24）
- (3) 埋土中で併存する土器群（擦紋Ⅲ（古）：8～11・元地2式：12～14）
- (4) 魚骨ブロック1（擦紋Ⅲ（古）：1～3，4：坏，元地2式（古）：5～7）

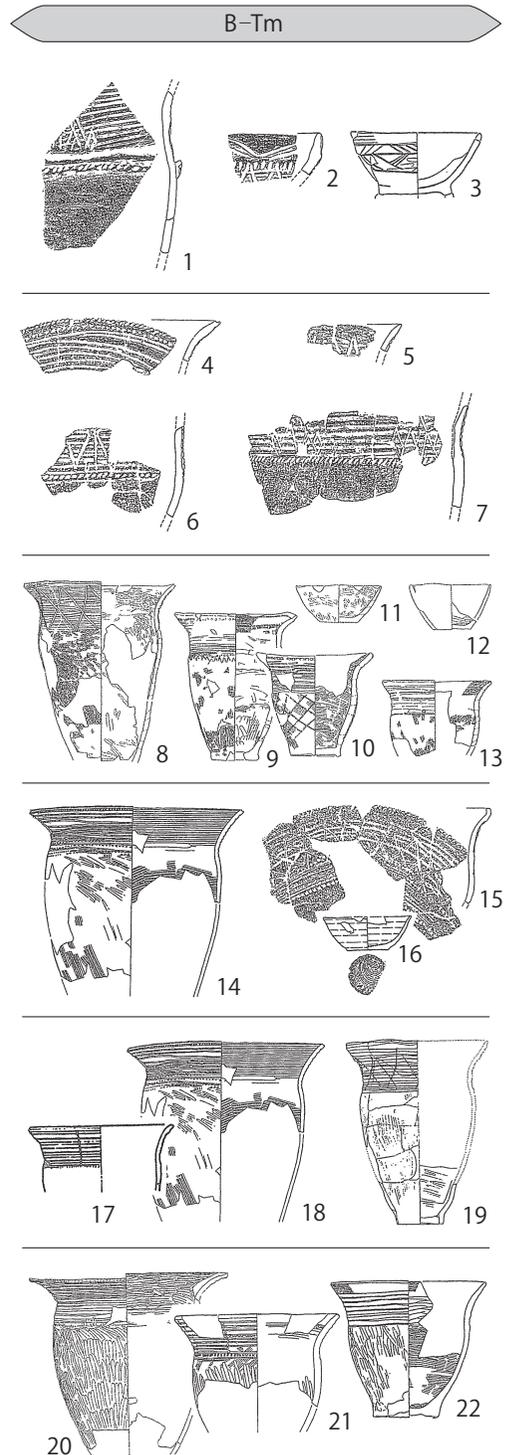
このように新旧の層位事実は，型式学的に矛盾なく対比できる。道央と島嶼域の「接触」は，層位的な事実においても，確実に傍証されたと言えよう。

そこで，「元地1式」と「刻紋土器A」に並行する擦紋Ⅱの年代について，広域火山灰を利用して検討してみよう（柳澤，2015g：128）。

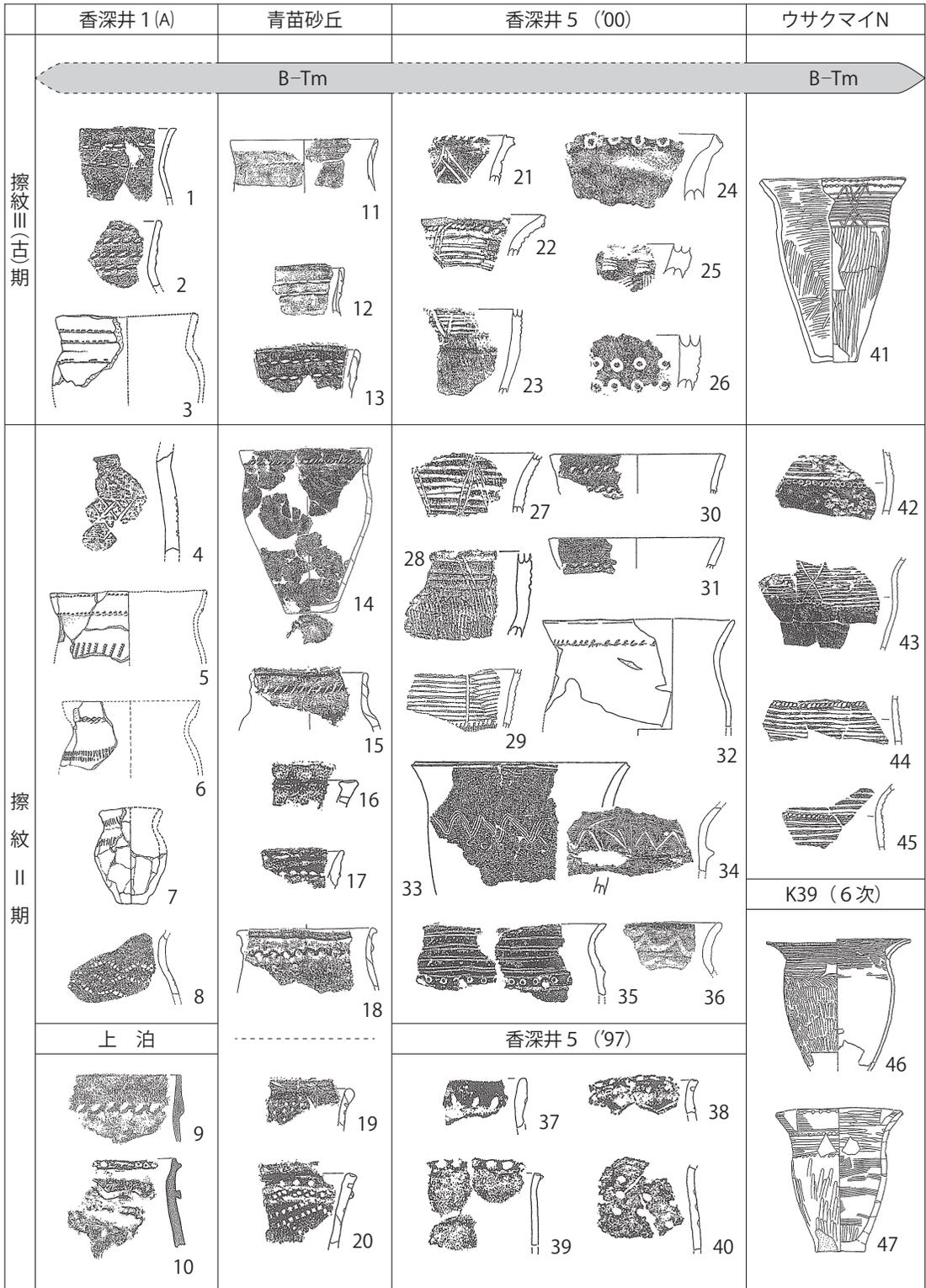
4) B-Tm 降下以前の道央「擦紋Ⅱ」の検討

道央の擦紋土器編年において，B-Tm 降下年代の重要性は自明のことと認められている。しかしながら降下年代には諸説がある。他方，考古学側の編年案にも，十分でない点があるようである。

それらの解決には時を俟つとして，試みにB-Tmの



第18図. B-Tm 以前における擦紋Ⅱ・Ⅲ（古）期の土器変遷。



第 19 図. 擦紋Ⅱ・Ⅲ(古)期における道北島嶼域・奥尻島・道央の広域編年.

所見が豊富な札幌市 K39 遺跡の事例を参照して、擦紋Ⅱの年代観を見直してみよう(第 18 図)。B-Tm 下の土器群は、大きく新旧の二群に区別される。

(1) 擦紋Ⅲ(古): K39 (6 次 6g 層(新): 1~3)

(2) 擦紋Ⅲ(古): K39 (7 次 10d 層: 4~7)

(3) 擦紋Ⅱ: K39 (長谷工地点 4 号 堅穴 (5g 層: 8~13)

(4) 擦紋Ⅱ: K39 (6 次 6g 層(古): 20~22)

層位的にみて、これらが B-Tm の降下年代(A.D.937~938 年^(註15))を遡ることは、まず確実であると言える。年代を絞り込むために、9 世紀代とされる以下の標本例を挿入してみよう。

(a) 擦紋Ⅱの標本例(佐藤, 1972: 17)

(b) 「最初の擦文土器」(塚本, 2007: 18・19)

佐藤編年では、17 例を「擦紋Ⅱ」の第二段階(Ⅱ₂: 宇田川, 1980)に比定し、擦紋Ⅰの年代を「ほぼ 8 世紀」と捉えている。これに対して塚本浩司氏は、18・19 例を「9 世紀前葉~中葉」に比定している(塚本, 2002・2007)。30 余年の隔たりはあるが、両者の年代観には、擦紋Ⅰ・Ⅱに対比された土器や、道東に分布する擦紋Ⅱの年代幅からみて、大差があるとは考えにくい^(註16)。

佐藤達夫の「擦紋Ⅱ」は、塚本浩司氏の「最初の擦文土器」に他ならない。従って、その年代観が似ているのは、ある意味で当然と言えよう。なお筆者が旧著で述べた年代観、すなわち擦紋Ⅱ=刻紋土器 A 初頭の年代を 9 世紀の中頃とする考案も、佐藤編年と大差はない^(註17)(柳澤, 2008a: 630, 2009b: 120-132, 2011a: 214, 2015c: 516)。

従って佐藤の擦紋Ⅱ、すなわち誰もが認める「擦文土器」の年代観については、1972 年の時点において、夙に正鵠を射た見解が示されていたと認められよう。過去の言説を顧みることは、実は大切な意義があるのではなからうか(柳澤, 2015c: 516)^(註18)。

4. 北海道西部域編年と擦紋Ⅱ・Ⅲ期の年代

道南と道央の編年を対比するには、未だ資料に偏りがあって難しい(第 19 図)。しかし奥尻島では、栗田式を伴う「十和田式」の集落に、刻紋土器 A (14・15・17) が侵入しており、それに伴う模倣・変容土器(18 ≡ 16・19・20 ≡ 8)なども存在する。刻紋・沈線紋

土器(11~13)への移行も、層位的に確認されている。

また「オホーツク式土器」は、いずれも B-Tm 下の層準から出土しており、図示したように道北と道央・道南を対比する有力な「鍵」として利用できる(柳澤, 2009b)。さらに、刻紋土器 A と刻紋・沈線紋土器の序列は、夙に香深井 1(A) 遺跡で層位的に捉えられている(4 ≡ 5~8 → 1-3: 大井・大場, 1976)。

そこで、再仮設した香深井 5 遺跡編年(「刻紋土器 A = 元地 1 式=擦紋Ⅱ」)を年代学上の縦軸にとると、擦紋Ⅱと擦紋Ⅲ(古)に比定される土器群は、層位・型式の両面に基づいて、B-Tm を仮想延長した横軸によって、図のように明快に仕切られることとなる。そうした理解を旧著と同様に点線で示しているが、土器型式編年の原理からすれば、B-Tm の仮想的な延長は、十分に合理的であると考えられよう(柳澤, 2008a: 630)。

擦紋Ⅱに並行する土器群の年代に関しては、先に触れたとおりである。それに対して擦紋Ⅲ(古)の場合は、B-Tm の降下推定年代(A.D.937~938 年頃)から擦紋Ⅱの終末までに求められる。詳論は別の機会に述べるとして、目下の見通しでは、その年代は通説の擦文「前期・中期」編年を見直すと、9・10 世紀の境界を前後する頃になると考えられる^(註19)。

おわりに

本稿で検討した香深井 5 遺跡編年は、礼文島内の他の遺跡でも、何ら矛盾なく整合すると考えられる。他方、利尻島との編年対比に関しては、これまで検討が十分ではなかったように思われる。

報告された資料のみならず、未公表の資料や新発見の資料を参照すると、通説と異なる礼文・利尻島編年を仮設することは、十分に可能であると考えられる。まず、利尻島を代表する亦稚貝塚の資料から、煩瑣な資料の分析に取りかかりたい。

謝辞

本稿で利用した香深井 5 遺跡の資料については、2007 年の 8・10 月、船泊町に長期滞在して、悉皆的に出土土器の撮影・拓本・実測などを行った。その際に、礼文町教育委員会の藤沢隆史氏には、種々の

ご教示とご配慮をいただいた。利尻島の資料に関しては、利尻町立博物館の佐藤雅彦氏、利尻富士町教育委員会の山谷文人氏より格別のお世話をいただき、佐藤氏には、本誌への寄稿を快諾していただいた。また、本稿の通読・校正を長山明弘氏にお願いした。末筆ながら、厚く感謝の意を表します。

註

- (1) 2015年3月に上梓した新著では、北海道島と大陸及びサハリン島の編年を連結し、それにB-Tmの降下年代を挿入した細密な環オホーツク海域の編年体系を提示している(柳澤, 2015c)。その他に、通説編年の全道的な見直しを試みた6篇の論考(柳澤, 2015a・b・d～g)も発表した。
- (2) この資料の由来や、その他の事情については、夙に詳しく紹介されている(加藤, 2011)。
- (3) 大阪市立博物館が開催した特別展「オホーツク海文化の謎」の図録(同博物館, 1970)では、1例の「香深村」土器について、「擦文をとりいれたオホーツク式土器」であると明快に説明されている。誰もが認める「擦文土器」の紋様が、厚手の「オホーツク式」に折衷されていることを初めて認めた所見として注目されよう(柳澤, 2013a, 2015c: 2-4)。ちなみに佐藤達夫は、夙に「香深村」土器を取り上げ、擦紋Ⅱの斜格子紋土器として位置づけている。その学史上の意義は今も等閑に附されているが、それは単なる「忘失」に拠るのであろうか(柳澤, 2013a: 76-121, 25-32, 2015c)。
- (4) 1970年代において、大井晴男は擦文土器の編年に関して佐藤達夫と正面から対立し、「東大編年」(駒井, 1964)を支持する立場を明確に表明し、独自のオホーツク・擦文文化論を縦横に論じていた(大井, 1970, 1972, ほか)。ところが佐藤の逝去から27年後、大井は「土師器」と「擦紋土器」を系統的に区別する佐藤の擦紋編年論(佐藤, 1972)を受け入れて、「土師器」を「擦文土器」に内包させる「東大編年」からの離脱を正式に表明するに至った(大井, 2004: 310-456)。この自説からの「転向」については、「東大編年」の様々の問題点(柳澤, 2013a)とともに、全く不問に附されている。学史論・編年論の観点からみると、いささか奇妙な偏りがあるように思われる。近年の「北大式」や広義の「擦文土器」論にも、そうした傾向が認められることは、どのような意味を持つのであろうか。
- (5) 佐藤達夫の編年では、河野広道が紹介した千歳村堅穴遺跡から出土した擦紋土器(河野, 1932, 1933)を、擦紋Ⅲの第一段階(「擦紋ⅢⅠ」: 宇田川, 1980)に比定している。これは山内博士が「日本遠古之文化7」(縄紋式以後)において、「擦紋土器」の標本として引用したものに該当する(山内, 1933; 柳澤, 2013a, 2015c: 2-4, 11-27)。佐藤達夫は、本例に先行する擦紋Ⅱを4細分し、単純な「垂直沈線」(直線紋: 第4図6)の標本に関しては、その第二段階に比定している。
- (6) 三角刺突紋は擦紋Ⅱのみならず、島嶼域の刻紋土器Aや、それに伴う変容土器などにも伴う。また、三角刺突のみを帯状に施したオホーツク系の模倣土器なども存在する。具体例については、旧稿の資料を参照されたい(柳澤, 2006b: 76-79, 2009a: 120-125, ほか)。
- (7) 第6図2例の鋸歯状紋土器は、第3号堅穴の出土資料(遺物番号144)として、テンバコに格納されていた。その詳細は不明であるが、藤沢隆史氏より、確実に本址出土の資料であるとの教示を得ている。床面か埋土下部より出土したものと推測される。双方とも元地1式と刻紋土器Aが伴出しているので、両式とともに、上層の魚骨ブロック1(元地2式+擦紋Ⅲ)よりも下位から検出されたことは間違いないと考えられる(柳澤, 2011b: 348-355, 2013c, 2015c: 241-243)。
- (8) 「元地1・2式」については、当初は「元地式」と「プロト元地式」に細分し、型式内容の検討を続けていた(柳澤, 2007b, 2011b, 2012)。その後、前者を「元地1式」(擦紋Ⅱ・刻紋土器A並行)、後者を「元地2式」(擦紋Ⅲ, 刻紋・沈線紋土器, 刻紋土器B並行)と呼称し、双方

の細分、道央との正確な対比を心掛けている（柳澤，2013c，2015c：239-249）。

- (9) 報告書によると「第Ⅰ～Ⅲ層」とは、
- 第Ⅰ層：元地期の遺物包含層と第1・2号住居跡（DW1・2号）及びピット
- 第Ⅱ層：刻文期の第3号住居跡（DW3号）とその周辺で検出された数基の炉
- 第Ⅲ層：十和田期の遺物包含層と第4・5号住居跡（DW4・5号）・集石遺構・ピット
- と記載されている。これは「発掘調査時の層の認識を中心にした表現である」という（内山・熊木・藤沢，2000：16）。なお、第7章の「まとめ」（熊木氏担当）では、1988年度調査の大詰め段階で判明した遺物包含層としての「Ⅱ層」の存在を独自に読み替えて、「Ⅰ・Ⅱ層」出土のオホーツク式を「Ⅱ層」に、そして「擦文・「元地式」土器群」を「Ⅰ層」と規定し、統計処理上の理由から、文化層の区分を便宜的に
- Ⅰ層：「擦文・「元地式」層
- Ⅱ層：「オホーツク文化期の上層」（刻文期）
- Ⅲ層：「オホーツク文化期の下層」（十和田期）
- と扱い、セリエーション編年法を用いて香深井Ⅰ(A)遺跡との対比編年を試みている（熊木，2000a：151）。
- (10) 「突帯」を有する刻紋土器Aについては、特に注目されていない。香深井Ⅰ(A)遺跡では、魚骨層Ⅳ（大井・大場，1981：第335図7）から、利尻富士町役場遺跡では第3層から、低い隆起帯にスタンプ紋を施した一例が検出されている（内山ほか，1995：第14図124）。
- (11) 通説編年の妥当性を検証する手掛かりとして、「凹線（紋）」に注目したのは、2006b論文（61頁）が最初である。それから八年後、擦紋Ⅱ・Ⅲ期の道東編年を検討する際に、「凹線紋」の編年上の意義について、広域的な観点から詳しい検討を試みている（柳澤，2014b：35-56）。
- (12) 第12図の3例は接合資料である。左側は「D23区」、右側は行方不明のため、詳細は分からない。なお、この資料については、北海道考古学

会の例会（2007年7月）において、「伊茶仁ふ化場第一遺跡と北方編年体系—擦紋末期土器から貼付紋紋系土器群への展開—」と題して発表を行った際に、通説編年を見直す有力な「鍵」資料になることを、鋸歯状紋を持つ上泊遺跡の刻紋土器A（第19図9＝10，大川1998：拓図8-6）とともに説明した。

- (13) 第13図8・9例に近似した元地Ⅰ式の資料は、礼文島の上泊遺跡でも出土している（大場，1968：36下段左）。刻紋土器Aの「爪形紋」を取り入れたもので、他に横走沈線紋を施した例もある。どちらも刻紋土器A・擦紋Ⅱを折衷したキメラ（折衷）土器と認められる。従って上泊遺跡でも、香深井5遺跡と同様に、双方の集団から影響を受けていると考えられる（柳澤，2014a：194-195，2014b：29-32，2015c：120-123）。
- (14) 6例に近似する標本例としては、香深井Ⅰ(A)遺跡の諸例（大井・大場，1981，魚骨層Ⅳ：第363図2・3，364図2・3）などが挙げられる。
- (15) B-Tmの降下年代については諸説がある。本稿でも、旧著と同様の観点から（柳澤，2015b：註8，2015c：409-410；註8），A.D.937～938年の降下説（福沢ほか，1998）を採用する。
- (16) 佐藤の編年案（佐藤，1972）では、擦紋Ⅱ（第2～4段階）と土師器の「公園—中島松—西島松南B」の序列が対比されている。西島松南Bの竪穴に伴う坯は上げ底である。これは一般に9世紀代とされる。厚真村当麻内の擦紋Ⅱ（第2図2＝1例：第四段階）が対比候補とされている。また西島松南Bの別竪穴では、ロクロ製品も検出されており、佐藤が提示した年代観（前出：485）を斟酌すると、擦紋Ⅱの年代が9世紀以降に及ぶことは、まず確実であると考えられる。
- (17) 筆者は、刻紋土器A＝擦紋Ⅱ₁₋₄の年代を9世紀の中頃以降（後半）に比定した考案を、夙に発表している（柳澤，2008～2011）。それと関連して斎藤淳氏は、北奥の「擦文（系）土器群」を検討する際に旧論の年代観を見直し、K39遺跡の6g層土器群（第18図19・20）の年代を、

塚本氏と同様に「9世紀中葉～後葉」と捉えている(齋藤, 2012: 68-72)。

- (18) この点にちなみ、佐藤の逝去後に刊行された著書に見える1975年の論評は、1970年以來の北方編年研究の歩みに鑑み(大井, 1970, 1972, ほか)、その意義があらためて注目されよう(佐藤, 1983: 518; 「擦紋土器の変遷について」)。
- (19) 今のところ、擦紋Ⅱ・Ⅲ期の境界年代を正確に推論することは難しい。考古資料とB-Tmの年代観を勘案すると、ほぼ9世紀の終末か、又は10世紀初頭に求められると考えられる(柳澤, 2015c: 512-513・第16表)。

引用・参考文献(五十音順)

- 石附喜三男, 1968. 擦文式土器の初現的形態に関する研究. 札幌大学紀要教養部研究論集, (1): 1-44.
- 出穂雅実, 2001. K39遺跡 第7次調査, 札幌市文化財調査報告, 66. 札幌市教育委員会.
- 上野秀一・仙波伸久, 1993. K435遺跡, 札幌市文化財調査報告, 17. 札幌市教育委員会.
- 宇田川 洋, 1980. 擦文文化, 北海道考古学講座. みやま書房.
- 内山真澄・西谷栄治・熊木俊朗, 1995. 利尻富士町役場遺跡発掘調査報告書. 利尻富士町教育委員会.
- 内山真澄・熊木俊朗・藤沢隆史, 2000. 香深井5遺跡発掘調査報告書(2). 礼文町教育委員会.
- 大井晴男, 1970. 擦文文化とオホーツク文化の関係について. 北方文化研究, 4.
- 大井晴男, 1972. 礼文島元地遺跡のオホーツク式土器について. 北方文化研究, (6): 1-36.
- 大井晴男, 2004. アイヌ前史の研究. 吉川弘文館.
- 大井晴男・大場利夫編, 1976・1981. 香深井遺跡(上・下). 東京大学出版会.
- 大川 清, 1998. 北海二島—礼文・利尻島の考古資料(手控・拓図). 窯業史博物館.
- 大阪市立博物館編, 1970. 第45回特別展オホーツク海文化の謎. 大阪市立博物館.
- 大谷敏三・田村俊之・西連寺健, 1981. 末広遺跡における考古学的調査(上). 千歳市教育委員会.
- 大谷敏三・田村俊之, 1982. 末広遺跡における考古学的調査(下). 千歳市教育委員会.
- 大場利夫, 1968. 北海道周辺に見られるオホーツク文化Ⅱ. 礼文島・利尻島. 北方文化研究, (3): 1-44.
- 岡田淳子・宮宏明編, 2000. 大川遺跡における考古学的調査Ⅰ. 余市町教育委員会.
- 小野裕子, 2000. 擦文期の北大構内遺跡群. 北大構内の遺跡Ⅱ.
- 加藤 克, 2011. 札幌農学校所属博物館の利尻・礼文調査資料について. 利尻研究, (30): 7-30.
- 熊木俊朗, 2000a. 香深井5遺跡の変遷と居住パターンに関する問題. 香深井5遺跡発掘調査報告書(2).
- 熊木俊朗, 2000b. 香深井5遺跡出土「元地式」土器について. 香深井5遺跡発掘調査報告書(2). 礼文町教育委員会.
- 熊木俊朗, 2011. オホーツク土器と擦文土器の出会い. 異系統土器の出会い. 同成社.
- 河野広道, 1932. 胆振国千歳村火山灰下の堅穴遺跡. 人類学雑誌, 47(5): 165-177.
- 河野広道編, 1933. 北海道原始文化聚英. 民族工芸研究会.
- 河野広道, 1958. 先史時代篇. 網走市史. 網走市役所.
- 小針大志・秋山洋司, 2006. K523遺跡. 札幌市文化財調査報告81. 札幌市教育委員会.
- 駒井和愛編, 1964. オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡(下巻). 東京大学出版会.
- 齋藤 淳, 2012. 北奥における擦文(系)土器の終末について. 青森県考古学, (20): 67-80.
- 榊田朋広, 2009. 北大式土器の型式編年—続縄文・擦文変動期研究のための基礎的検討1—. 東京大学考古学研究室研究紀要, (23): 39-91.
- 榊田朋広, 2011. 擦文時代前半甕形土器の型式学的研究—続縄文/擦文変動期研究のための基礎的検討2. 日本考古学, (32): 33-57.
- 榊田朋広, 2015・2016. 2014年度・2015年度北海道. 考古学ジャーナル, 670・685: 142-145, 135-138.
- 佐藤達夫, 1972. 擦紋土器の変遷について. 常呂.

- 東京大学文学部。
佐藤達夫, 1983. 日本の先史文化—その系統と年代—, 河出書房新社。
佐藤友治・亀井喜久太郎, 1956. 厚真村古代史, 厚真村教育委員会。
札幌市教育委員会編, 2006. K523 遺跡, 札幌市文化財調査報告 81。
鈴木 信, 2003. 道央部における続縄文土器の編年, 千歳市ユカンボシ C15 遺跡 (6). 北海道埋蔵文化財センター。
田才雅彦, 1983. 北大式土器, 北奥古代文化, 14: 20-29。
種市幸生・内山真澄・荒川暢雄, 1997. 香深井 5 遺跡発掘調査報告書 [1]. 礼文町教育委員会。
種市幸生・田中哲郎・菊池慈人・山中文雄・遠藤昭浩・松田淳子, 2001. ウサクマイ N 遺跡, 北海道埋蔵文化財センター調査報告書 156。
塚本浩司, 2002. 擦文土器の編年と地域差について, 東京大学考古学研究室研究紀要, 17: 1-34。
塚本浩司, 2007. 石狩低地帯における擦文文化の成立過程について, 古代蝦夷からアイヌへ, 吉川弘文館。
中田裕香, 2004. 擦文文化の土器, 考古資料大観 11 (続縄文・オホーツク・擦文). 小学館。
藤井誠二, 1997. K39 遺跡, 長谷工地点, 札幌市文化財調査報告 55. 札幌市教育委員会。
藤井誠二, 2001. K39 遺跡, 第 6 次調査, 札幌市文化財調査報告 65. 札幌市教育委員会。
藤澤仁之・塚本すみ子・塚本 齊・池田まゆみ・岡村 真・松岡裕美, 1998. 年縞堆積物を用いた白頭山 - 苫小牧火山灰 (B-Tm) の降灰年代の推定, Laguna (汽水研究), 5: 55-62。
藤本 強, 1966. オホーツク土器について, 考古学雑誌, 51-4: 28-44。
松谷純一・上屋真一, 1988. 中島松 6・7 遺跡, 恵庭市教育委員会。
皆川洋一, 2002. 青苗砂丘遺跡 [1]. 北海道立埋蔵文化財センター。
皆川洋一・越田賢一郎, 2003. 奥尻町青苗砂丘遺跡 2. 北海道立埋蔵文化財センター。
柳澤清一, 1999. 北方編年研究ノート. 先史考古学研究, 7: 51-99。
柳澤清一, 2000. 南千島から利尻島へ—道東編年と道北編年の対比—, 東邦考古, 24: 12-37。
柳澤清一, 2006a. 道北における北方編年の再検討, 古代, 119: 79-122。
柳澤清一, 2006b. 北海道島・南千島における北大式～擦紋IV期の広域編年, 人文研究, 35: 43-115。
柳澤清一, 2007a. ニツ岩遺跡編年の再検討—擦紋III期における道東と道央の対比—, 人文研究, 36: 35-89。
柳澤清一, 2007b. 北方島嶼の先史考古学, 北海道大学総合博物館ニュース, 15: 11-13。
柳澤清一, 2008a. 北方考古学の新天地—北海道島・環オホーツク海域における編年体系の見直し—, 六一書房。
柳澤清一, 2008b. 道北・道央から見た環オホーツク海域編年の予察, 先史考古学研究, 11: 119-165。
柳澤清一, 2009a. 擦紋II期における道央・道北, サハリン島南部編年の対比, 人文研究, 38: 99-140。
柳澤清一, 2009b. 新しい青苗砂丘遺跡編年と北方古代史研究, 古代, 122: 79-121。
柳澤清一, 2010. 擦紋III期における環宗谷海峡編年の検討, 比較考古学の新天地, 同成社。
柳澤清一, 2011a. 北方考古学の新展開, 六一書房。
柳澤清一, 2011b. 南貝塚式から見た環宗谷海峡編年案の検討, 古代, 124: 97-132。
柳澤清一, 2012. いわゆる「元地式」(「接触様式」)編年の再検討, 古代, 127: 113-160。
柳澤清一, 2013a. いわゆる「東大編年」と山内博士の「北方編年」説の相克, 人文研究, 42: 57-140。
柳澤清一, 2013b. 「オホーツク文化」と擦文文化の接触, 同化・融合説, 人文社会科学研究所プロジェクト研究報告書, 251。
柳澤清一, 2013c. 礼文島浜中 2 遺跡 (1990 年度) 調査資料の編年, 古代, 131: 143-184。
柳澤清一, 2014a. 香深井 1(A) 遺跡における「オホーツク式」年代観の改訂, 人文社会科学研究所プロジェクト研究報告書, 276。
柳澤清一, 2014b. 擦紋II・III期における通説「道東」編年の検証, 人文研究, (43): 25-90。

- 柳澤清一, 2015a. ウトロチャシコツ下遺跡における「貼付紋系土器」編年の再検討(前篇). 人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書, 290.
- 柳澤清一, 2015b. 道北(島嶼域)「北方編年」における年代観の改訂—浜中2遺跡出土の須恵器片をめぐって—. 千葉大学考古学研究室考古学論攷II, 六一書房.
- 柳澤清一, 2015c. 北方考古学の新潮流—「逆転編年」説の検証と「オホーツク文化」年代観の改訂—. 六一書房.
- 柳澤清一, 2015d. 道東における「オホーツク文化」年代観の改訂—「遼時代の素焼土器」と伴出遺物をめぐって—(前篇). 人文研究, (44): 53-134.
- 柳澤清一, 2015e. 道東における擦紋IV期以降の層位事実と紋様現象について. 先史考古学研究, (12): 113-157.
- 柳澤清一, 2015f. 灰白色火山灰と道東「貼付紋系土器」編年の見直し. 古代, (137): 89-104.
- 柳澤清一, 2015g. 水禽・鱗状モチーフから見た「貼付紋系土器」の編年. 古代, (137): 105-139.
- 山内清男, 1933. 日本遠古之文化 7(4) 縄紋式以後. ドルメン, 2(2): 49-53.
- 横山英介, 1987. 北海道におけるロクロ使用以前の土師器. 考古学雑誌, 70(1): 52-75.

図版出典

- 第2図. 1:河野編(1933), 2:佐藤・亀井(1956).
- 第3図. 1:大阪市立博物館編(1970)・筆者撮影(2013年), 2~6:岡田・宮編(2000).
- 第4図. 1~8:札幌市教育委員会編(2006).
- 第5図. 1~6:上野・仙波(1993).
- 第6図. 1:内山・熊木・藤沢(2000), 2:筆者拓本・実測(2007年), 3・4:種市・田中ほか(2001), 5・6:松谷・上屋(1988).
- 第7図. 1~10:柳澤(2011b・2015c:第168図)より編成.
- 第8図. 1~30:柳澤(2011b・2015c:第167図)より編成・補足.
- 第9図. 1~4:内山・熊木・藤沢(2000), 5~20:筆者撮影(2007年).
- 第10図. 1~6:筆者拓本・実測(2007年), 7・8:大井・大場編(1981).
- 第11図. 1~13:筆者拓本・実測・撮影(2007年).
- 第12図. 1~13:筆者拓本・実測(2007年).
- 第13図. 1・2・5~8・11:筆者拓本・実測(2007年), 3・4・9・10・12:内山・熊木・藤沢(2000).
- 第14図. 1~7・9:内山・熊木・藤沢(2000), 8・10:筆者拓本・実測.
- 第15図. 1:筆者拓本・実測(2007年), 2・3・7・8:内山・熊木・藤沢(2000), 4~6:岡田・宮編(2000).
- 第16図. 1~16:筆者拓本・実測(2007年).
- 第17図. 1~21・23~27:筆者拓本・実測・撮影, 22:内山・熊木・藤沢(2000), 28~37:種市・内山・荒川(1997).
- 第18図. 1~3・20~22:藤井(2001), 4~7:出穂(2001), 8~13:藤井(1997), 14~16:上野・仙波(1993), 17:佐藤(1972:fig300 毘沙別)・石附(1968), 19:大谷・田村(1982).
- 第19図. 1~8:大井・大場編(1976・1981), 9・10:大川(1998) 11~20:皆川(2002), 皆川・越田(2003), 21~31・33:筆者拓本・実測・撮影, 32, 34(改変)~36:内山・熊木・藤沢(2000), 37~40:種市・内山・荒川(1997), 41~45:種市・田中ほか(2001), 46・47:藤井(2001).